いらつめ

第二十三號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第二十三號目次　（明治廿二年五月十五日）

社説
皇后陛下の萬歳を祝し奉り併せて慈善を論す　新保磐次君

美文藝術
和文の變遷　美妙齋主人
夏の初入を懐ひ起して　小金井きみ子
小金井に花を見る記　夢のや　うたる
音樂稽古の心得　立花家　うたる
柳櫻都錦繡

家政
洗濯法…棉布‖毛織物‖白無垢‖戸〻‖白縮子‖色絹‖絹に付た油のシミを落す‖戸帳‖黒布の色揚‖リンチンの鉄錆を落す●●瓜の漬様…奈良漬‖胡瓜の鹽漬‖胡瓜を苦味なく漬く‖瓜類の糖漬●●物の腐敗を防ぐ法…飯のすへるを防ぐ法‖酢のかびを防ぐ法‖生肉の腐敗を防ぐ法●●魚鳥類の鹽漬法…鴈鳬の鹽漬法‖魚の子の鹽漬法‖牡蠣の酢漬法‖魚の酢漬法‖魚の砂糖漬法‖獸鳥肉の鹽漬法●●即席砂糖漬の法●●冷たる揚物を温くする法●●果物類の貯様…栗を貯ふる法‖柿を貯ふる法‖葡萄を貯ふる法●●味噌の製法

雜纂
母ひとり子ひとり
葡萄牙の風俗及ひ其婦人
酒を飲む妻を娶て醉漢豪富となる
女生徒の自炊

小説
𪀚蠶書　第三回　鶯亭飯人作

寄書
地久節に付いらつめ方に申す　法學士　渡邊輝之助君
如電居士に與ふ　琴水女史

懸文賞藝
春の野あそび　（一等賞）　靜觀山人
仝　（仝）　松木よし子
仝　（二等賞）　江崎龜六郎

通信問答
和歌唱歌の作り方‖烟筒に火の入たを防ぐ法‖ストウ女史は誰‖手足の荒れを治す‖壁に付いたインキを去る‖西洋人の婚姻年齢‖虫類を寄せ付けぬ法‖小兒の夜泣を治す‖湯垢を去る‖日本に茶の始めて渡つた年月‖眞菰の灰‖疣を去る法‖玉子の腐敗を防ぐ‖飯の腐敗を防ぐ‖黒繻子に付いた襟垢を落す‖香永を製する簡法‖小兒の寐起‖讀んで害にならぬ人情小説は何ぞ‖齒磨粉は如何なるものを擇ぶべき‖女の名の下に子の字を付け始めた時代‖富貴豆の製法‖物を貰ふを無心といふ譯‖クリーパーの化粧石鹼‖ニキビを去る‖日に焼けたを白くす‖頭の禿けるを防ぐ法

月報

附録
織田信長公木下藤吉郎の妻女に遣す手簡の眞蹟

いらつめ第二十三號

社說

皇后陛下の萬歳を祝し奉り併せて慈善の事を諭す

來五月廿八日ハ我　皇后陛下の御誕辰に當らせらるゝに付文記者ハ當日を地久節と名け臣民擧て　陛下の萬歳を祝し奉らんとの議を建て諸女學雜誌記者は　陛下の愛撫し給ふ臣民殊に女性に代りて其議を贊したりき假令公に祝日と定めさせらるゝの運に至ざるも當日女學校ハ業を休み家婦は針を止め陛下の健康を祈り　陛下の盛德を頌し奉るべしされば如何なる辭もて　陛下の盛德を頌すべきや

陛下の德大なると東海も啻ならず豈微臣の能く頌せる處ならんや　陛下の君臨し給ひしより上は　至尊を翼贊し給ひ下は億兆を愛撫し給ふ　大御心は九重雲深きも餘光は漏れて草莽を照し下民常に　陛下の慈愛に泣く申すも畏き限にはあれとも宮城曾て炎上し赤坂の假の宮居に移らせ給ひてより屋破れ雨漏るも常に下民の辛苦を思召し繕ひをさへせさせ給はさりきと承り難波の朝の昔を思ひ出て坐ろに淚に咽び合ひぬ西南の戰起るに及び親ら宮女を督して綿撒糸を織らしめ給ひ負傷の兵士に下し賜りしかば兵士は其恭きに泣き士氣爲に振ひ幾もなく平定に歸し嘗て風叫び浪怒るの日軍艦の進水式に横須賀に臨ませられ篠突く雨の日對抗運動に埼玉に臨ませられ海陸軍人益々國家の爲　帝室の爲身を致さんとし慈惠醫院は專ら　陛下の令旨に成り又屢々　親臨して病者を訪せ給ひ赤十字社は專ら　陛下の奬勵に成るが如き凡慈善の事業　陛下の監督奬勵に成らさるはなし殊に女學記者として女性に代りて陛下の大恩を感謝すべきは女子教育に　大御心を勞させらるゝの一事なり貴族の女子は專ら　陛下監督の下に教育せられ近くは高等女學校女子職業學校に　親臨あらせられて有り難き　令旨を下し給ひ金剛石の　御詠によりて津々浦々の鹽汲む海士に至るまで學問の修むべきを知る猗歟　陛下の盛德何の辭をもて頌し奉らん朝な夕な億兆の爲に勞させ給ふ　大御心何を以てか報ひ奉らん。

辭をもて頌し奉るも　陛下の盛德に於て涓滴も增す處なし唯　陛下の大御心をもて心とし有難き　令旨に副ふヿを務めば希くば　陛下の大恩の涓滴を報ひ奉るヿを得ん。

陛下の　大御心は慈愛の海なり　陛下の大業は慈善の府な

りされば　陛下の萬歳を祝するに當り聊か慈善の事を談して
陛下の　令旨に答ふる處あらんとぞ
慈善の心は本天性にして外より強ゆるものにあらざるは勿
論なり然れども其社會の事情は慈善の心を以て發して慈善の
事業とならしむると唯慈善の心にして終らしむることなり何を
か社會の事情といふ嘗試に之を論ぜん　未開の社會は恰も下
等動物の如く開明の社會は上等動物の如し下等動物の身体の
組織は甚簡單にして何れを頭とも足とも分かぬものさへあり
て兩斷すれば二個の動物となりて生活し三分するも四分するも生活するものあり稍進みて昆虫に至りても手を斷てば手は
自動し足を斷てば足は自動するなり愈進み上等の動物となれ
ば其組織緻密にして一打も急處に中れば全体を斃すことを得べ
し社會も之と異なることなし未開の社會に在りては食物は自ら
撈り衣服は自ら織り家屋は自ら造るが故に鄰家擧て賊の劫す
る處となるも少しも關する處なし鄰村擧て賊の燒く處となるも
少しも關する處なし然るに開明の世となりては人と人との關
係密となるなり例へば我東京府下の如き飮む水も人工になれ
る水道の供給を仰ぐことなり夜の光も瓦斯電氣に依頼することな
り今一朝水道の本源塞がることあれば府下の民は忽ち渇すべし
瓦斯局電氣局に過ちあらば府下は忽ち暗夜とならん其他鐵道
の如き一日にして數百里の遠きに行くべきも機關手に懈怠あ
らば數百の人生ながら奈落に墮落せん此の如く開明の世とな
れば萬事他人との關係密となることにて申さば「持つ持たれつ」と
いふ境界なりされば開明の世の人は未開の時の如く他人と痛
痒關せざる如くにては一日も世に立つこと能はず必ず手を引連
れて共に進まざるべからずもし世の人悉く達者なる人のみな
れば世話も心配も無用なれども此世は差別の世なれば男女老
弱の別あり貴賤貧富の別あり健康なるものあり不具病者あり
已に手に手を取りて進むべきものなれば富貴の者健康の者は
貧賤不具病者を扶けて共に進まざるべからず是れ即慈善の事
業の開明の社會となりて起る所以なり而して扶くるものと扶
けらるゝものとの間は開明の度進むに從ひて懸隔甚しくなる
ものなれば慈善の事業は開明の進む程多端となるものなりも
し富貴健康者にして貧賤不具病者を打棄置かば社會は忽ち怨
望をもて滿ち猜疑をもて滿ち鬱して破裂し互に相殺して後已
む然らば慈善の事業は社會の緩和劑となるものにして　帝室
にして之を務め給はゞ　帝室の基を固め國民互に之を務めば
一國安泰なるべし　皇后陛下の　大御心は慈愛の海なり　陛

下の大業は慈善の府なり復何をか申さん希くば國民擧げて慈善を務め以て　陛下の令旨に答へ奉り以て一國の安泰を計るべきなり

文藝美術

夏の初め人を懐ひおこして

美妙齋主人

や、肌心地のい、南風。待つばかりの杜鵑、愛らしい春は何處に痕を潜めたか、今只夜は蕪らぬ月のみを掛けて、白の玉簾に緑を彩るさはやかさ。池の幼いものも時を得て雨孕む空に雀躍すれば弄生の浮草もほのかに足を浮せませう。水無月の乾蒸はまだ隔る夢一結ひ。うるはふ嫩風ようるはふ土の間。わが道筋に銀を殘す、おとなしい蝸牛のかよわい力を助ければ苔も銀糸で縫取りした襷となッて、散り布いた花にはかない宿を貸します。あ、夏の初！　春とはまた趣を似せてさて違へた風情、つたない口には言ひ盡されず、言ひ盡くすべき人はと問へば、むかし共に折つた若楓ばかりがその節さして仄に風に囁いて居ます。

小金井に櫻を見る記

小金井　きみ子

上野の山に白くもを分け、すだのつゝみに花のはらすも年々のことにてめづらしげなきに、さきつ日より甲武鉄道ひらけそめぬと聞き、ことしは小金井の花をこそとて新宿といふ所より汽車にのりぬ車はまたゝくひまに中野をもすぎて境につきたれば停車場に下りたるに、こたび新につくられたるなれば、よろづきよらかにていと心地よし。今迄同じ車にかくばかりのりたらんとは思はざりしに、下る人二百人にもあまるべく、小金井へ行べきあらたなる道は人いと多く、都の市の心地ぞせし、櫻橋と云ふ橋より左に折てゆくに、こゝらはちか頃うゑしと覺しく若木のみなるが、八重なればいまだひらかず。やう／＼絶／＼に白くもの棚曳をみるに、あしのはこびもはやくなりて櫻さく木の本に來りぬ。堤ふたみちにわかれて中を流るゝは玉川上水なり。むかし承應の頃、この水を大城にひきたりしが水毒をけすと云ふ說によりて享保元文の時よし野また所々より櫻の梢をうつし植しを更に百餘年を經て嘉永年間にいたりて朽たるをのぞき、植そへて四十一町餘のあひだ花の梢もてみたされたるなりとぞ。彌生の十日あまりの頃なれば空うら／＼と晴渡り、かなたこなたの堤に櫻花今を

盛りと咲みちて下を流る玉川の清き流に影うつすは上野墨田の遠く及ばぬ眺めなり。

　香をとめて來汲む人やとひくらむ、花の下行玉川の水。

とゝよなゝれる橋は多かれど、小金井橋のあたりはことに梢もものふりておもむきあるがならび立ち、咲ものこらぬをあはれと詠むるはとしづかよそよぐ春風よ花のひとひらふたひら水のかゞみよちりかゝりたる、また苔のみどりにまき書したらんやうにあれるあどいとをかし。ゆかりの色のすみれぐさは木の本ようるはしく咲出てゆかしくにはひ、又珊珠の玉をぬきみだしたるかと見ゆるまでしどみとか云ふものゝ花足のふむべき所もなくこぼれ落たるが菫と色をあらそひたるはどおもなべて春の心地するに、とゝかしとによりつどひ花のかげに、敷物しきてわりごひらきてあそぶ人もいと多かり。道のかたへに櫻折べからずの碑あるをしるやしらずや酒よえひたる人の花の大きなる枝心なく折とるは國女か歌を聞せまはしき心地す。海岸寺門前よ小金井櫻樹碑文あり。茶屋でとにひさく武藏野小金井櫻順道繪圖と云ふものよしるしわれは今はちらしつ。かく所〴〵をみめぐりありきて、

我舊よゆかりある名を聞はあは立はなれうき花の木のもとしづかに月前の花もみまほしけれど遠き所とことなりて一たび汽車よおくれんよはかへるたよりうしなふべければまたことてかへりぬ。そは神奈川縣下東多摩郡よありて東京よりは七里ばかりの道なるをかくわづかのひまよ行かへらるゝはみな鐵道のひらけし故にて福羽大人の武藏野みやげにある如くいとたよりよくめでたき御代よあん有ける

柳櫻都の錦繪　三幕目　立花家かをる作

場割　○桝橋立花家場○御藏揃殺の場○大詰根岸別莊捕物場

役割　○立花家小夏實は清子○花垣先太郎○箱屋峯三實は巡査伊東峯三○立川芳雄○新田富三○芳雄妻花子實は藝妓小六○探偵荒尾專作○正作○雇婆お福○仕出若子外に巡査大勢

本舞臺四間常足の二重上の方一間の障子屋体向ふ三尺の緣喜棚これよ續いて茶壁三味線を掛け眞中暖簾口の出這入り例の處誂の格子戸の入口擔に立花屋小夏と記せし御神燈をかけ都て桝橋藝者屋の体宜しく二重に酒肴の道具を幷べ先太郎酒を飲み箱屋峯三唐綫着流しにて酌を爲しゐつと下にお福ふけた

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

る雇女にて控へ酒盛の摸樣雪下ろし好みの端唄にて幕開く(先)峯公貴樣はもとは巡査を勤めたさうだが粹なヿでしくぢつたのか(峯)とんでもないと「私なんぞに構つて呉れる女は一人も有りません(福)イヽエ峯殿は樣子が能いから御巡査さんを爲て居る中は丸で音羽屋そつくりだよ(峯)ソソナラ私ちが音羽屋よ」とそり身になつて一寸菊五郎の聲色にて言ふ(先)音羽屋は松助の方だろ(峯)えゝなんのこつた」旦那え此の節はもー御集會や演説は爲さらぬのですか(先)こりや〱不粹なヿを言ふな僕は近來あんなヿはそつかり罷めた(峯)へいそんなら政黨とか自由黨とかへは御構ひはあり升んか(先)箱屋のくせに野暮なヿは言わないで飲め〱」と盃を峯三にやる(峯)お福さん一寸酌をしてお呉れ(福)はんに生意氣な峯殿だよ(峯)旦那は時々新橋へ御出掛なさる樣子だがすつかり知つて居り升すから今度はどうぞ御一所に御連なすつて下さい升し(先)馬鹿と言えー(福)浮氣を爲さつちやいけませんよ(峯)さうだとも〱姉さんが可憐さうだ故湖月なぞへはこれ柄はもう御出掛けはなり升せんゾ(先)夫れを知られちや面目ない然し何にから何まで探偵が(峯)えとぎつくり仕打(先)よく屆いたと見える

わい」と互ひに酒を飲み先太郎は大分酔つたる仕打にて横になる合方きつばりとして雪下ろし我物の端唄になり向より小夏實は淸子島田かつら好みの拵へ藝者にて手拭をあげ蛇目傘をさし湯上りの体にて出で來り直に内に入る(福)をや姉さん御歸りなさい」と傘をつぼめてやる小夏は髮毛をかきながら(夏)旦那は御休みか(峯)なあーに姉さんが晩い故やけに大きな物で召上り今御休みになつたばかり(夏)はんそに困つた人だねー」と先太郎は起き上り(先)とゝ歸つたかさて〱女の湯と云ふものは長いものぢや(夏)御湯で「かをる」さんと「小てる」さんに逢つた故つい〱晩くなり升た……そや何にも御肴が無い樣だ峯殿なにか取つて來て御呉れ(先)氣の毒だなあー(峯)どう致し升してと傘を持ち外に出で(峯)ヿによると御誂は言ひつ放しにして一寸用を達して來ますから(夏)あゝイゝよ(峯)そんなら姉さん跡でゆつくり(夏)知らないよ(峯)どれ行つて參り升ふ」と端唄にて花路に行くと荒尾專作好みの拵へ探偵にて出で來り(專)伊東君少しは樣子が分つたか(峯)僕も色々盡力すれば二三日内にいきつと探つて見せるつもりだ(專)しつかり頼むぜ未だ相談することが有るからそこらで一盃やらう」と

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

二人は話を為ながら向へ這入る跡先太郎は小夏に酌をさせで酒をのみたわいなき仕打(福)御膳の仕度を致し舛ふとお福は奥へ這入る(先)清子(夏)はいと側により四面を見廻し思入合方替つて(先)先頃家を仕舞つてより立川氏の縁より根岸の秋田の別荘に同氏と共にひそみ居り…和女は賤しき勤めと為すも座敷に出る度毎に人の替れば自から政府の樣子も知れやうと心にもなき酒席に侍りさぞや苦勞を致すで有う(夏)これは勿体ない其の御言葉貴方の御為になると故なんて苦勞に思ひ舛ふ仰の如く此節は忘年會の集會多く毎日貴顯大臣方に御目に掛れば夫れとなく御上の樣子を窺ふにどうやら自由の黨中にきびしく目をつけ色々と手を廻されて探偵をなされる樣にムり舛れば必ず共に一時ももう御油斷はなりませぬ(先)夫りや思に違はず當路の人には我れ等に益々着目あるか……最早大坂表には同志の計畧全く合し來月早々朝鮮に出發なさん結構なれば今一時が安危の境(夏)當路の方の樣子を知るはこんな稼業に限り舛す(先)實に我等の好手段なほも樣子を探つた上一々根岸に報じて呉りやれ(夏)幸ひ今夜は橫網の內務の方の御邸に口が掛つて居り舛れば又何事か知れ舛ふ(先)何分宜しく(夏)必ず御報申し舛そ」と此の時下手より仕出の鰻屋の男岡持をもち出で來り門を開け(男)へい御誂へ」と鰻の箱を出す(夏)これは御苦勞樣(男)毎度姉さん有難う存じ舛す」と引返して歸る(先)大分調子が能くなつたなー(夏)御耻しゆーム舛」と二人は酒を飲んで居る雪下ろし合方になり向より前幕の立川芳雄唐棧着流し町人の拵へ傘を差し出で來り(芳)御賴み申し升そ(夏)誰何樣でムり升す」と門を開き(夏)これはこれは立川樣幸ひ夫も居り升れば(先)御免下されと」內に入る此の時下手より以前の峯三出で來り思入あつて臺所から這入る心にて下手に忍んで這入る芳雄は四面に思入あつて(芳)早速ながら花垣氏まづ御悦なされ(先)夫りや大坂の同志の者から(芳)只今密書が到着し升た」と懷中より密書を出すを先太郎は受取り口の中にて讀むとあつてお夏に見せる(先)書面の如く爆烈彈を始めとして萬事の手筈も調ひたれば事を擧んも來月早々(先)多年の望みも成就の時(夏)御目出度存じ升すと三人は密書を見て感心の仕打此の以前より峯三のれん口より首を出して樣子を窺ふ小夏は思はず後を向きびつくり仕打これにて峯三は首をかくす小夏はさてはと云ふ思入れ(芳)大坂に於て我黨の熱心に計畫されし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

には實に感服致し升た夫れにつけ今日到着せし爆烈彈を御目に掛け尙御相談の儀もムればこれより根岸に御歸り下され(先)左樣なら直に御同道致し升す」と立ち上り二人は外に出て(先)そんなら濟子必ず共に(夏)はい二人は傘を差して花路にゆくと下手より峯三知らぬ樣子にて出で來り跡より聲を掛け(峯)もし〳〵旦那もう御歸りでムり升すか(先)をゝ峯公か一所に行つて車を賴んでくれ(峯)へい」と三人は向へ這入る跡小夏は見送つて門を閉めはつと思入れ本釣鐘をうち込み思案の仕打にて(夏)日頃柄して怪しいと目をつけ置いた彼の峯三どうやら大事を知つたる樣子こりやひよんなとになつたわいなあー」ぢつと仕打一層殺して仕舞ふと色々考るとあつて(夏)疾くに此の身は無きものと覺悟はきわめて居るなれば今が命の捨て所夫の爲めと大望のさまたげとなる彼の峯三不愍ながらも手に掛けて此の身も死ぬるが上分別……とは云ひ如何なる因果にや女子の身にて大それた先には人の財を奪ひ今又人を殺すとは鬼とも蛇とも恐ろしきこんな心になつたるも持つて生れた宿世の定業思ひ廻せば廻す程あぢきなき身の行末ぢやなあー」と愁ひの仕打幸ひ誰も居らぬ故一伍一什を書き殘し今宵をすでさ

ずさうぢや〳〵」硯箱を出し卷紙を取り出しぢつと仕打本釣鐘しんみりとした合方になり書き置をかく此の時向より峯三醉たる仕打にて出て來る直に內に入り(峯)姉さん今戾り升た」これにて小夏は手紙をかくすとあつて(夏)をや峯殿大分御機嫌だね(峯)へい旦那を御送り申して御祝儀を戴き寒さ凌ぎに一盃やつて參り升た……こりや御手紙でそか……姉さんの樣に美しい女に手紙をもらふ人は男冥加と申すもの……いやなに姉さん去年の春は束髮の野暮な姿の生娘も今ぢやー立派な姉さん株其の箱持ちは去年まで人民法護の警察官替り易いは世の常と役者の舞臺でよく云ふが隨分奇妙なとですネー」(夏)はんに去年の櫻時乱暴人を取り挫ぎ其の引合から警察署へ御前に引かれた其の時はこわい人とは思ッたが今ぢやすつかり樣子が替りとんだ似合の箱屋さん(峯)巡査を罷めて活路を失ひ遂に箱屋と爲つたるも本の起りは姉さん故(夏)エー(峯)びつくりするには及び升せん未だ廣小路の派出所に毎日詰めて居る內にふッと見始めた束髮姿どこの娘か知らないが世にも美人のあるものと朝夕心を惱ます中不審儀なとに巡行の折に圖らず上野にて職務の爲めに姓名番地委しく知ッて夫れ柄は尙も思ひは增

すばかり其夜谷中に歸る路身投げの窮を助けた時圖らず手に入るこなたの寫眞(夏)ヤー」とぎッくり思入れ(峯)之れを隠くして朝晩にこなたと思ッて居る中に遂に署長の耳に入り免職されて仕方なく所々方々と食ひ詰めてとーとー玆ゝの雇人…盡きせぬ縁だとも姉さん柔さしー言葉の一ッ位掛けて呉れてもいーぢやーないか」これにて小夏はさてはと云ふ思入(夏)御酒を食べると例でもそんなとばかり(峯)酔つての上ではムい升ん男の身にて去年よりこんなに苦勞を爲て居るを少しは察して下さい升しと」しなだれ掛るを小夏はつき飛し(夏)をふざけでないよ(峯)こりやきつい御立腹……へい今晩はと三味線に客の氣嫌を取る樣に外部は見せて內實は深くもたくむ大望の(夏)ヤー(峯)イヤ大部酔つて參り升た」と峯三は捨臺詞にて色々小夏を口說く此の時向より仕出の男一人傘を差し出で來り直に門を開け(男)横網の邸から參り升たが直ぐにどうぞ(夏)ハイ只今直に御苦勞樣と」これにて使は引き返して歸る(峯)御約束の御座敷ですか(夏)どれ仕度爲升ふ」と思入あつて小夏は障子屋体に這入る時の鐘になり峯三は門を開け(峯)イヤ又降つて來たわいと此の時下手より以前の專作コソ／＼出來り(專)ドーダ(峯)今夜間が有つたら君の所へ行ふと思つたら又これから座敷と」四面を見廻し專作に耳語く(專)ウンそんなら根岸の別莊に(峯)アコレ」と四面へ仕打此の樣子を小夏は障子を開き殘らず窺ひ出の着物に着替へ出で來り(夏)峯殿(峯)エーぴつくりし升た(夏)外に何にやら(峯)エー」とひつくりありや犬で」と木戸をしやん」と閉める木の頭」ムい升す」と惣方氣味合の思入れ專作は宜しく仕打此見得雪下ろし端唄にて柏子幕跡同じ鳴物にてつなぎ道具出來次第直に引き返す

和文の變遷　其二

新保磐次君

萬葉以後漢文益盛りにして、和文は僅かに婦人の間に殘れるのみ。然れども和歌の盛りなることは却りて古に過ぎ、醍醐天皇の朝に勅して近世の歌を撰び集めしめ給ひき。其顚末は彼の歌集の序文に明かなり、曰わく

今皇の天の下知ろし召すこと四ッの時九返りになんなりぬる。遍き大御愛しみの浪八洲の外まで流れ、廣き大御惠の陰筑波山の麓よりも繁くおはしまして、萬の政を聞こし召す暇、諸の事を棄給はぬ餘りに、古の事をも忘れじ

讀りにし事をも興こし給ふとて、今も見そなはし、後の世にも傳はれとて延喜五年四月十八日に大内記紀友則御書所預紀貫之、前甲斐小目凡河内躬恒、右衛門府生壬生忠岑等に仰せられて、萬葉集に入ぬ歌、自のをも奉らしめ給ひてなん。其れが中にも梅をかざすより始めて、杜鵑を聞き、紅葉を折り、雪を見るに至るまで、又鶴龜に付て君を念ひ人をも祝ひ、秋萩、夏草を見て妻を戀、逢坂山に至りて手向を祈り、或は春夏秋冬にもわらぬ種々の歌をなん撰ばせ給ひける。總て千歌廿卷名づけて古今和歌集と云ふ。

さて右の序文は貫之の作にして、是より先醍醐天皇の御代始めに大堰川の行幸ありし時供奉の人々歌を奉りける、其序文も亦此の人の筆なりき。是より後、歴代勅撰の歌集の序を始めとして假名文漸士君子の間に行はれたり。貫之又土佐の國の守となりて四年彼の地に在しが、其の都に歸り上る路をから假名文にて日記を書きたり、今に傳へて土佐日記と云ふ。されば貫之は和文中興の祖なり、假名文の開祖あり

貫之の序文に擧たる當時有名なりし歌人は僧正遍照、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黒主なり。其歌各得失ありと雖も、皆當時第一流の人々にして、謂はゆる六歌仙とは是を云ふあり。業平と小町の美貌は世の知る所なり、而して二人の傳記には妄說多し。小町は晩年に身を黒主に寄せたりと云ふ。遍昭は仁明天皇の寵臣にして美男の名高かりし良岑宗貞の成れる果てなり。嘉祥二年宗貞選ばれて外國公使を接伴し。世の覺え華やかなりしが、翌年天皇崩御ありしかば、宗貞悲みに堪ず、御葬送の夜家を捨て僧となり、名を遍昭と改めたり。康秀と喜撰は履歴傳らず、而して喜撰は山城の宇治に住せしと其歌に明なれば今に至るまで宇治の茶銘に喜撰あり。

此の時代に在て貫之と躬恒とは實に歌道の名人にして、恰万葉時代に人麻呂、赤人が互に上下せしが如し。後二百年、源俊頼が和歌の宗匠たりし頃、人口貫之、躬恒の優劣を論じて決をると得ず、こゝに於て貫之を主張せる人俊頼に至りて決を請ひしに、俊頼唯領きて、「躬恒を侮らせ給ふな」とのみ云ひしとぞ。俊頼が意蓋躬恒に許せしならん。

今其一二を吟じて之を比較せん。貫之の離別の歌に

掬ぶ手の　雫に濁る山の井の
　飽かども人に別れぬるかな

誠に飽かざるを形容するの巧み極まれり。夏日山中に運動し少量なる岩間の清水を掬びたる兒童は此の味ひを知るあらん

然れども、躬恒が舊友を訪ひし時の歌に、

引き植ゑし　人は宜こそ老いにけれ
松の木高くなりにけるかな

と云へるは何の巧みもなけれども眞情人を動かす者あり。又

住吉の　松を秋風吹くからに
聲打ち添ふる沖つ白波

と云ふ歌は、けだかく貴き中にも、豪爽の氣言外に溢れ、人をして立舞んと欲せしむ。思ひ入りたる眞情は躬恒の長處にして他人の及び難き所あり。然れども眞率に過ぎて整はざる歌多し。貫之の作には温雅整齊ならざる者殆無し。而して謹愼にして平凡に類する者實に少からず是俊頼等が云々する所以か。

貫之に男女の子あり。男子の名は時文とて村上天皇の御世に他の四人の者と共に勅を奉じて昭陽舍即梨壺に於て後撰和歌集を撰ぶ。梨壺の五人とは此の人々を云ふなり。百年許り後に出來たる榮華物語に云へるやう、

古今には貫之が席最をかしう作りて仕ふまつれり。後撰集にも左樣にと思し召しけれども……今は左樣の事に堪へたる人無くて口惜しく思し召しけり。

五人の中にも源順などは和漢文の達者と聞こえしが猶貫之には地を讓りけ人かし。誠や此の順朝臣の筆なりと云ひ傳ふる竹取物語の外は殊なる和文も無かりしよ。

此の御時清涼殿とて重上の常の御座所ある梅の木枯れたりければ或る家に色濃く咲きたる木の在りしを堀り取らしめ給ひけり。彼の家主「其木に之を結び付けて」とて差し出だしたる書き物を叡覽あるに

勅なればいとも畏し鶯の
「宿」はと問はゞいかゞ答へん

とありければ奇しく思し召して何者の家ぞと尋ねさせ給ひければ是れなん貫之の娘の住む所なりければ即此梅を返し賜はりけり。是「鶯宿梅」の故事にして君臣優美の事跡今に芳し

唱歌の心得の續き　　夢の星　かをる

初學の唱歌者は歌句の末若しくは句の中央にて適宜に氣息を取べし、しかするときは其脇を保つところの筋肉漸次に兩側に開出し且つ肺臟の下なる筋肉(即ち横膈膜)も亦同じく強壯となりて氣息を意の欲する如くに呼出するを得べし然れども長き時間を保續するの音調は初歩に在ては決して望むべからざるものにして或音調に於ての菱形音(スエール)を極めて巧妙に唱ふ

ことは發音力最後の發達に屬すべきものあり而して之に達せんには運動、練習の二事を始終不斷に繼續するより外に其方法無し。

音聲の練習は最初の多時は極めて柔弱にあすべしとれ伊太利諸名家の說なりてれ初學者の宜しく紳に書そべきことゝす抑も柔唱の練習には先胸を十分に滿さざるべからず胸を滿して柔唱するに是非筋肉の制御に注意を怠るを得ずこれ頗る音聲練習に稗益ある所以あり且つ初步の人に音の純否と音の性質の如何とを自悟せしむるの好機會を與ふるものも亦たこの練習に屬せり

「ミセス、ブレーハンド」曰く何の場處を問はず氣息を取るの機會あらば之を取るの習慣を作れ假令汝は不要用と思ふとも尙務めて之を取れとこれ亦初學者の服膺すべき金言あり何となれば一たび此好習慣を作りし以上は自己は容易に無造作に氣息を取ことを得て他人には毫も之を感ぜしめざるべし實に吸氣するに、騷々敷仕方はと他の耳に不愉快を與ふるものはあらざれば唱歌者は專ら此點に注意せざるべからず苟くも鼻と口とを充分開けば單に脇腹を開張するのみにて肺臟は忽ち滿量に達すべし何ぞ必しも騷しきせつなき息遣を要せんや

唱歌の体勢は既に詳述したれども再び茲に約言するの必要を感ぜり

（一）兵士の休憩するときは体勢の如く踵を接して立つべし
（二）頭を直立すべし然れども後方に傾けしむべからず
（三）肩を後方に送るべし然れども聳立せしむべからず
（四）肺臟は自然に滿すべくして非常の場合の外は張り上ぐべからず
（五）脇筋は決して之を緩めずして兩脇は衣裳に觸れしむべし而して下腹は內面に退かしむべし
（六）口は自由に開くべし然れども魚口形なるべからず而して唇は齒の外面に觸しめて開き目より僅に突出せしめ音聲を死せざらしむべし且下顎は落下せしめ上顎は上揚せしめて肺臟より來れる氣息を其前部に於て受しむべし又舌は平かならしめ其先は恰も下齒に觸しむべし

以上は初步の唱歌者の嚴守すべき要則たり此等は最初の間は總て頗る窮屈を感ずれども幾も無くして之に慣れ百事容易なるを得て彼の樂しき顏色は樂しき音調を生するとの古格言を實行するに至るべし

又敎師たるものが生徒に上記の体勢を作らしむるに方りて

は一、二、三、四、の如き號令の詞を用ひ生徒は其數の示すところの体勢を取るを可とす而して教師は生徒の果して令詞の如くに体勢を取るや否やに注目し若し反戻するものあらば即座に改めしむべし又口の開きの二指を容るゝにあらざるものあらは左の言を斟酌して諭戒すべし

「ガルシヤ」の日常口の如く卵形に口を開け然るときは悲み且呻吟するが如き音調を生ぜん、漏斗形の如くに唇を突出せよ然るときは堅くして且吠るが如き音聲を生ぜん歯を大に露すが如く廣く口を開け然るときは粗暴なる音調を生ぜん　歯を大に閉るときは震へるが如き音調を生ぜん云々

以上の諸點は授業の初期即ち最初の教課に於て充分の注意を要するものなり蓋し生徒を怠惰の習慣若くは粗暴平板の唱法より救んと欲せは夙に此等に注意するより外に良方法無なり

唱歌に緊要の關係ある諸筋肉の練習

（一）肺臓の側及び其上なる筋肉を練る事

此練習は初歩に於ては各教科の初めに必ず復習せしむべし而して可成的生徒を室の周邊に列立せしむるを可とす何となれば斯くするときは教師は生徒に近接して充分に体勢上の不良部分を指摘し得るの便あればなり其練習法は左の如し

教師の揚手すると同時に生徒は舒々に氣息を吸取し其揚手する間は之を保つべし而して教師の靜かに下手するときに口より之を呼出すべし

教師は下手する際に一、二、三、四、等と數ふべし（此數字の一は「メトロノーム」(柏節機の六十分の一にあたる)而して生徒は其呼息の絶えたるところにて直ちに揚手して教師に報すべし但最初の間は能く四秒間を保續すると以て滿足せさるべからず而して肺臓の虚弱なるものは四秒に達せさるもの往々あり

（二）純粋の音聲を生ぜんがために喉頭を練る事

此練習も亦初歩に在ては各科の初めに復習せしむべきものあり

教師は Oh. Ai. の綴を（と）調又は（い）調にて唱ひ生徒は教師の手を開くと同時に發唱し手を閉づると同時に默止すべし然後教師は一度 Ai の音を與ふべし但今度ば直ちに其音を更に開朗なる AA. の音に變すべしこれ舌の位置に極めて僅少の變化を與ふるのみにて能く伊太利的 AA の音を發し得るを以てなり

生徒の教師に摸擬して其注意の專ら舌の位置と音の清潔との二點に存するに至らバ他の諸調に移して練習すべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

家政

洗濯法

是から洗濯を要する時ともあります。そして洗濯のために美しい衣服も得られ、また健全な身体も得られますから精細に洗濯法を説くのも無用では有りますまい。

一　棉布

棉布を洗ふには先づ薄いアルカリ液に浸します。が、強いのは蒸氣に中てるのです。それから籠に布を入れ、清水へ浸して搖り洗ふのです。が、更に角アルカリ液に中てると布に砂のやうな汚が殘ります。で、棉布は麻や亞麻より化學作用を強く起すものです。因つて此特質に從ひ、やがて次に極めて稀い硫酸に暫時浸し、それから又清水で洗ひます。これで充分に洗濯は出來ます。が、注意すべきことは長く硫酸の中へ浸して置くと、布が弱くなる事です。

二　毛織物

毛織物を洗ふ最上の法は左の仕方です。即ち川水五、小便一の割合の水を華氏の五十六度に温め、その中に布を二十分間浸し、やがて流れ水で洗ひ、それから乾かす、この法を幾度もつゝけるのです。毛を柔にして而も色を白くするには此に上越す法は有りません、

三　白無垢

晴天の日に強く曝し、後になるたけ柔い毛の刷毛でそれを拂ふのです。

四　更紗

米二ポンドを五升の水に入れて柔になるまで煮、桶または皿に移して冷まし、それへ更紗を入れ、米糊（既に柔になつた）で揉んで洗ひます。これで汚れは大抵取れます。次にまた前のとほり別に米を水に入れて煮、米を漉去り、湯にまた之を割り、それへ入れてまた洗ふ、これで充分な洗濯が出來たのです。乾上かると全く新らしくなります。

四　白繻子

フランス白墨をふりかけ、刷子ではらひ落すのです。

六　色絹

はじめ柔い石鹼で洗ひ、水でふりだし、綠礬の液をすこし水に加へてまたふりだします。が、これは黃、眞紅、猩々緋、葡萄酒色などに限ります。鹿子色、鳶色、また橙色などに酸類は中てられません。洗ひ了れば、なるたけ端から

巻いて後、水を絞るのが宜しいです。 その後温な部屋へ入れて影乾にすれば申分は有りません。

菫茶色、薔薇色などを洗ふには緑礬の代りにレモン液が、酢を用ゐるのです。

青、紫などは不潔炭酸剝篤斯をすこし用ゐるのです。洗ひ了つてはゴム水に浸し、取り上げて張つて置くのがよろしいです。

他の間色は大抵以上の忌嫌を避けてすれば洗へます。

七　絹についた油のシミを落す。

フランス白墨の粉を油のある處にふりかけ、やがて布を遠火に掛けると、油は鎔けてそして、浮いたその油を白墨が吸取ります。 で、白墨を刷子で拂ひ落す、この法を幾度も繰り返すのです。

八　戸帳

石鹼をよく布に塗り、熱湯に浸して刷子で擦るのです。

九　黒布の色揚

よく布を洗ひ、半時間ほどの間蘇木を二三オンス煑立てた液の中に浸します、半時間煑立て、緑礬をすこし入れてまた半時間煑立てます。 それから一二時間、竿に掛けて影乾にし、後にまた冷水で洗ひ、乾かして後、橄欖油を一二滴塗つた柔い刷子で丁寧に布を拭ふのです。

十　亞麻の鐵鏽を落す

レモン液を汚れた處に塗り、また其所に食鹽をふりかけ、火にさらして乾し上げる、この法を幾度も用ゐるのです。

瓜の漬様

○奈良漬　七八月頃よき菜瓜または越瓜を求め縦に割り種子を除いてよくすき取り其凹處に鹽を十分に充て槽又は瓶に入れ強くおしをかけ置き翌朝天氣よくば十分日の當る處にて鹽液の漏れぬやう仰けてほし日暮に至り又前のごとく槽につけ翌朝もまた乾し瓜の色白めにならば皮の方をほし皮の淡黄色になるに至らば一枚宛反古にて包み瓜五十枚によき酒粕三貫目の割合にて漬け小蠅などいり來るものなればよく蓋をなし其上を澁紙の類にて覆ひ繩にて縛げおくべし器物もあるべく口の少き瓶などをよしとす

又前の如く割りて種をさり水にて濯ぎ水氣のなきやうに乾し瓜の凹處に鹽を八分ほど瓜厚くば九分程もいれ器物にいれてよく〱おしをかけ二晝夜ほど經て取出しその鹽液にて洗

ひかはく〳〵とする迄火陽よ晒し扱爪にかすを多くぬり互につきあはぬやうよ瓶内よ並て塩を霜の降りたるがごとくふりかけ粕にも少し塩をまぜて漬くべしまぜかたは粕一升に塩五合ばさよてよし諺よ粕よ瓜をつくべしうりにかすを漬るとなかれとも云ひて粕の多きかたをよしとす瓜はうつぶせにつくべく蓋は赤土にて目塗をなし風を引かぬようよそるをよしとす
またうりをはそとき天氣の都合あしく臭氣抔つく恐れもあれば塩を多く加へ至りて強くおしをかけ液をよくさり干さずして直よ漬るもよし
又胡瓜茄子紅豆抔も一二晝夜塩につけ液を出し粕よつくれば味佳し

○胡瓜の塩漬　八九日頃よ至りて末なりの青きうりを取り百匁に塩一升木灰三合計を和ぜて漬けおしを強くなし置き翌年の二三月頃に至りて程よく塩を出し用ゐる酒の肴抔よ至極珍し

○きうりを苦味なくつく　胡瓜はまゝ苦きものありて誠よ厭ふべし之を漬る前よ其蔕の方を少し切除きて水に浸し凡一時間餘もおくときは毫も苦からず
又水よつけずとも其切口を糠みその上面をすれ〳〵位になして漬くれば苦味を生せず

○瓜類のぬか漬　瓜茄子その他何にても當坐づけをなす糠みそは生糠一升よ炒ぬか二合を和せて造れば五年許もし直そに及はず年々用ゐてよし

物の腐敗を防ぐ法

○飯の餿るを防ぐ法　夏日めしの餿るに莧の葉を覆ひれけば一宿をふるもその憂なし又井水を汲みて數日桶又ば瓶に貯へ置きそのうはずみにて飯を炊けば永く餿ず
また釜より飯を移す時飯鉢の中に塩梅一顆をいれ置けば翌日よ至りても損せず併塩氣ある水または腐りたる水にて炊ぎし飯は其効なし
又炊きたてのめしを飯桶に移し匙にてよく壓て置き食事のそむ毎よ此のごとくし皮格に蔵めて風のいらぬやうよなせば手數にもならず餘程暑き時よても今朝たきし飯を翌夕までも保つことを得るなり

○酢のかびをふせぐ法　酢はかび易きものあれとも炒しは少許を入れ置けば夏月までもその憂なし

○生肉の腐敗を防ぐ法　暑中生肉の腐敗を防ぐには麪を温飩の如く溶て肉をその內よ裹み油の中よいれ置けは久しく損せ

ず粥は餅になして喰ひてよし
又寒水を貯置き魚肉を其肉に浸しおくもあり
または鰓を去り木炭を口と腹とよふくませおけば數日を經るも損せず遠方杯へ遣す時は一尾宛紙よて包み箱にいるゝをよしとす

魚鳥類の醃様

○雁鳧の塩漬法　雁鳧杯の毛を拔き捨て膓をさり洗はず毛やきせず其儘腹よ塩を十分に充て又口よりも篠竹よて塩を多くこめ又外よも塩をよくつけ足と翼とを一ッに結びあわせさかさまに釣りて一夜おけば塩ゆきわたるなり其後紙よつゝみ其上を苞よ裹みつりさげ置くべし諸鳥總て此の如くなしてよし

○魚鮞の粕漬法　鱈鯖鰈の鮞を塩につけ置き染みたる時能く液を除き青紫蘇の葉にてはどよく巻き粕よ漬け置くべし但反古にて上包をなすをよしとす紫蘇ば塩漬のものを用るもよし

○牡蠣の酢漬法　先百個の牡蠣の水氣を去り清水よてよく滌き鍋よ入れ其中へ塩少し許を酢一合五勺を加へそのまゝ火よのぼせ大約十分時間攪ませ上面へ浮ぶ泡沫を匕ひ去り頓て牡蠣を取出しあとへ胡椒又は丁子あどの類を適宜くいれ又煮ると大約五分時間にしてよく攪ぜ前の牡蠣をいれこれを壜又

は鑵につめて貯へ置けば何時までも風味甚佳く酒の下物となるあり

○魚の酢漬法　大魚は適宜く切り小魚はその儘何れにても磁鍋よ入れつかるまで醸酢を注ぎよく煮て後硝子壜につめ煮汁を注ぎ松脂よて其塞子を密てつけ冷室よ納めおくべし

○魚の砂糖漬法　先魚を剖き其筋目へ一面よ砂糖をつめこみ其儘よて二三日間平坦の處に置き砂糖染み燥きたる時之を拭ひ黴の生せぬやう空氣のよく通ふ處よいれ置くべし大卒魚五六斤許にさとう一握にて充分あり又之と同し分量の塩を混ぜて用ゐるも可なり但砂糖ハ少し赤みある品よてよし

○獣鳥肉の塩漬法　肉を程よくきりて塩をふりかけ桶に入れ一層毎に硝石を布くべし最易き法よして味を失ふとあし

即席砂糖漬の法

○生柚子を漬ける法　生柚子を漬けるにハ先薄く刻みて核をさり白砂糖を多く着けて暫時壓窄置き器よ盛り上に焼塩を小し斗り懸けて出せば口取の一種に妙あり

冷たる油滋を温むる法

○油滋を温むるにハ焙架の上よ一葉の白紙を敷き其上よて焙れば焦ぬ故に殆どあげたての如くあるあり

果物るゐの貯様

○栗を貯ふる法　栗を殻に充て口を藁にて塞ぎ地を堀りて之を倒に埋置けば翌年の夏迄味毫も變るとなし

又萠芽を生すべき所に焼鍋を當て壺に盛り其口に嵌るほどの土器を求め中心に栗の出る程に一孔を明け之を壺口に嵌め倒になし地に着けおけば芽生せず或は赤土を器にもり其中に埋むもよし

○柿を貯ふる法　樹梢にでも圓座にても靑くして未熟せざる澁氣の強き時採り其葉にて柿子の見えぬやうによく包み藁にて結び藁包にいれ日陰につり雨露のあたらぬやうになし置けば久敷存するなり

○葡萄を貯ふる法　十分熟せざるをとり一總づゝになし極燥きたる地を三尺許掘り底より二寸許の處に竹簾を置き其上にそれなはぬ様に並べ置き上には板を葡萄に壓れぬやうに把土を五寸許閣置くべし

味噌の製法

○胡桃味噌　上胡桃又は屑くるみにて茂一升になま豉五合飴五百目に交へて水を少し許加へ炭火にて煮つめ置くべし夏月にても損することなし

雑纂

母ひとり子ひとり

此頃學校の課業にアイルヴィングク氏のスケッチブックを讀みしにゼ、ウイドー、エンド、ハー、サンといへる一篇に至り子を思ふ母の慈愛をよく寫し出したれば教師の口譯を其儘書取しを貴社に寄そ聞誤りの節も定て多からん讀者之によりて原著者の意の在處を知らは女史の願足り　大阪　秋花女史寄送

物事に注意する人は英國に於て日曜日の靜かなるとに心付くとなるべし水車の響連枷の規則正しく打つ音鍛冶の鉄鎚の音農夫の耳語荷車の轢る音其他あらゆる仕事の響はすべて靜まり旅人少ければにや犬の吠ゆる聲を聞くとも稀なりかゝる時には余は常に吹く風も沈むかと思ひ綠草の青空に連なる野邊の景色を見て天上の靜けさも斯くやと思ふなりさても神を祭るの日を善くてこそ安息日と定めたれ万物の上に普く及ふ神聖なる安息日は道德の上にも勢力を及はすなり見よ休みなき情慾も靜まり心中自然に信神の心を萌すにならすや余は常に田舍の寺に行きて感するとあり日曜日には常時よりも一層信心深くならざるにせよ一層善き人となりたりと感ずるとなり

近年余か英國滯在中は屢田舍の寺に參詣しゝとなるか薄暗き通路潮したる石碑燻りたる位牌等すべて年古りて尊く見ゆるものは寺に詣るものをして深省を發せしむるなりさりながら富豪の家に隣するが爲か風俗の華美は寺院にも及べり余は前後左右に群る參詣人の華奢と冷淡なるを見ては寺院に在る

中も塵中に放り出されたる心地したりき參詣人の中異の信者と思しきは唯一人の老婦にして腰は齢と病の爲に傴みたり麁服を着けたれども其清らかなるにて全くの赤貧にもあらで又注意の深きをも知るに足れり又少しは村人の尊敬を受くるものと見え貧人の席にも就かず唯一人說敎臺の踏段に腰を掛けたりやがて祈禱をなさんとて吐息をつきながら起ち上り腰を屈めて祈禱文を手にすれど震へる手霞む目よく讀む能はず恐くは諳じをるとならん余之を見て此老婦の低き祈の隱音は役僧の讀誦よりも樂器の音よりも伶人の歌よりも速に天に通するならんと思ひき

余は常に田舍の寺院のあたりに漫步を試むるを好める此寺は位地のよきものから余は屢杖を此に曳けり寺は小高き丘の上にありて小流其下を環り軟草の野をわだかまりつゝ流れ去る寺の四面は年古りたる櫟樹をもて圍れゴシック風の塔尖は樹間より輕く拔き出て鳩や鴉はそのあたりをなきまはれり余は靜なる朝寺に遊びしに二人の傖夫來りて塚穴を掘るを見たりその穴は墓地の片隅にて側には跡弔ふ人もなき傾ける墳墓の壘々として在る塲所を擇ひたるを見て家乏しく助なき人の葬らるゝよと思ひきその時傖夫に聞けば果して或老寡婦が其獨子を葬むるなり余は之を聞き現世の貧富貴賤の差別は土と化し去る際までも及ぶものかと暫しは物思ひに沈みしが鐘の音は葬式の來るを告け知らせり貧人の葬式と見えて粗末なる棺には經帷子も覆はず村人は之を擔ぎ役僧は冷然として先に立ちて進み來ぬ世間体を繕ふ虛飾の喪者なきも唯一人眞の喪主ありてトボ／＼と棺に添ひゆけりこは死者の老母にして嘗て寺院に在りて說敎臺の踏段に腰掛けたりし老婦なり一人の賤しき婦人老婦を慰めつゝ手を取りてゐたり貧しき村人數人は葬式の行列に加はり願是なき村童は打連れて走りまはりては叫び立止りては喪者の悲傷の顏を打覗きなどしつゝきしたがへり

行列の塚穴に近づく頃和尙は衣うちかけ手に經を捧げ役僧を從へつゝ方丈より出來れりさりながら此勤行は唯慈善の業なりし死者は貧にして喪主もまた無一物なればなりさればにや樣式ばかりは行ひしもさも冷淡にさも無情に。和尙は本堂を出でゝ步を運ぶと數武看經の聲は墓地よりは微にして聞取り兼ぬるばかりなりき嚴肅悲哀は葬式の常なるに斯くまで虛僞なるは余の未た嘗て聞かざる處なり

余は塚穴に近よりしに柩は地上に据ゑられたる櫃の上には死者の名と齡を銘して「ヂヨルヂ、ソマルス、行年二十五」とわり老母は扶けられて柩の前に跪きをれり萎へたる手は組みて祈るものゝ如く身戰き唇震へり

柩を葬るの用意整ひぬ冷然櫃を下す差圖の聲砂礫に中る鋤の音何れか喪主の腸を斷つものにあらさらん老母は此音に空想を覺しけん暗きたる目を擧げて力なくあたりを見廻はし釣り下げんとて人々綱もて柩に近づくをみて手をもみ悲歎の涙にくれにける老母に附添ひし婦人は老母の手を執りて泣伏せるを起たしめ慰めんとてや耳語きけり「モー左樣クヨ／＼思ひなさんな」といへど老母は唯頭を掉り手を揉むのみ

人々が柩を釣下すとき滑車の軋る音老母の腸を斷つかと思はる我子は已に此世の苦患を逃れたれば其身には寸害も來ら

ぬものと信ずるが如く不圖したる機に柩の物に觸るゝを見ては老母は「あなや」と叫びけり

余は最早之を見るに忍びず余が胸はつまりて咽を突き目ハ涙をせきあへず老母の悲歎を何心なく傍觀しゝは無殘なるとありけりと感じたれば其處に居たゝまらず墓處を出で、他にゆき會葬者の散ずるまで其處に留りき

老母が遲々として心を傷めつゝ墓所には最愛ありし子供の亡骸を後にして氣拔けしたるごの如く家路に歸ると見しときは余が胸も爲に傷みたりき余倩考ふるやう富人の不幸は如何なるものぞ慰め呉るゝ朋友あり不幸を忘れしむる快樂あり壯者の不幸は如何なる者ぞ生長する心胸は直に創口を閉ぢ彈力ある精神は厭迫をも脱せんとぞ獨り慰むる人なき貧人の不幸今は唯冬の日の餘命を保ちよろこびの來ん望なき老人の不幸衰老孤居貧居し老後を慰むべき獨子を喪ひたる寡婦の不幸此等の不幸一身に集り一時に來る余をして慰籍も其功なしと感ぜしめし所以なり

間もなく余ハ墓地を去りて家路に歸りしが途にて老母の介添となりたりし婦人に出遇ひたり此婦人は老母を其淋しき家に送り屆けての歸るさなり余は此婦人に就きて余が今しがた目擊ししあはれなる事柄に因ある話を聞き得たり

死者の兩親は幼少の頃より此村に生長し小奇麗なる家に住ひき種々農家の仕事と少しばかりの畠ありて世間に義理を欠かず樂しく仕合せなる生涯を送りき夫婦の間に一人の子供ありて老人夫婦の杖ともなりし自慢息子なりし婦人はいへる樣「まあ貴君あの息子さんは氣立がよくて人には親切で兩親には孝心深いそれはそれは人柄な若衆でした丈がすらりと高く愛敬のある顔それにいつも日曜日には盛裝を着て阿母さんの手を曳て寺へお參をなさるのを見てさへ心持ちがよかつた阿母さんが自慢なすッたのも無理はありませんよ此近鄕近在ではあの方はどうつくしい氣立のよい方はありませんでしたもの」

不幸にもチヨルチは凶作の年に近邊を通行する川船の水夫に雇はれしが幾程もなく海軍の人取の爲に拐引されて遠き海へ引れたり（昔は無理徃生に壯者を拐引して水夫となせしなり）兩親はチヨルチの拐引されしとは知らずする人ありて聞しも其後如何になり行きしか風の便にだも聞かざりき兩親は礎と杖を失ひしが如し老父は豫てすぐれざりしに此事を聞きてよりハ忽ち氣落し遂に返らぬ旅路に出立せぬ寡婦は年は更け身は衰へ愛子には生別れ良人には死別れしとなれば今は自ら口を糊するのよすがもなく村役場に行きて扶助をこひぬさりながら村人はみな親切に世話し且古き住人なればとて幾分か尊敬しけり老婦が久しく住馴れし家は望人はなければとて本の儘に其家に住むことを許されて其處にわびしきあぢきなき世を送りけり少しばかりの畠は隣人時々來りて親切に世話し呉るれば常時の畑つ物には事を欠かざりき今余は話を聞ける日の僅五六日前の事かとよ老婦は食事の支度に畠のものをあさりけるをり畠に向ひたる戸の俄に開きし音しけり見知らぬ人が戸口より出來り熱心に不躾に圃内を見廻すが如し其風体は水夫にして瘠せ衰へ色青ざめて病氣と苦役の爲に身を損ねたる如き容子あり老婦の圃内にあるを見付け驅け寄らんとせし

も足はよろ〳〵として慥ならず漸くの事に老婦の前に跪きて小供の如くさめ〴〵と泣ぬ老婦は茫然として言をも出さず見詰め居たり「阿母さんあなたは私をお忘れなすッたのですか悴のヂヨルヂを？」と叫びたりこれぞ一度は氣高き若者なりしヂヨルヂの成れる果なる怪我の爲病氣の爲に身をそこね久しく見知らぬ國に閉ちこめられしより遂に幼時のなつかしき故山に骨を埋めんとて進まぬ足を曳きて歸り來りしなり

余は悲喜交も至れる名告りあひの委しきとは記さゝるべし兎に角ヂヨルヂは尚存生せり渠は故鄕に歸り來りしなり渠は老母を慰めもしつらん養ひもしつらんさりながら精力已に竭きたりヂヨルヂは老母が久しく輾轉眠られさる夜を過ぐし、寢臺の上に横はれり

村人はヂヨルヂの歸り來りしを聞き皆々枕邊に集ひ來て身分に相應しきとならば手傳もせん愉快をも取らせんと信實しくいひけれどもヂヨルヂは衰へて物言ふことさへ叶はず唯忝しを顏色にて知らするのみと母は始終側をはなれずヂヨルヂもまた他人に介抱せらるゝを好まざるもの丶如し

人病むときは壯年の我も折れて心は和き願是なき子供心に反るものなり人たとへ立身出世すとも病むときは我爲に哀み失望するとき我爲に悲むものは誰ぞ外國に在りて搆ひ手なく無聊なる時永く病の床にあらば我を哀むものは誰ぞ唯幼稚の時懷抱せられし母を思ひ我が枕をすかせし母を思ふの外なきなり嗚呼母の子に於ける慈愛の情は總ての愛を傾けて之に鍾むるとなれば子供の我儘の爲に減却せず危難の爲に畏縮せず無賴の爲にも弱められず恩を知らすとて消滅せず母は子供の都合の爲にはあらゆる快樂をも牲にすべし子供の樂の爲にはあらゆる快樂をも讓るべし子供の名譽は他人にも賞め子供の幸福には限なく悦ふべし

我子もし不幸に陷らは其不幸なるか爲に一層愛情を増す不名譽もし我子の名を汚すとも母親は其不名譽にも拘らす尚子供を愛するなるべし世人悉く我子を見捨ては母親は獨り子供と共にあらん

ヂヨルヂは病に寐ねて慰むべき人もなく淋しき牢屋の中にありて音問るゝ人なかりしか如何にかなしかりしかを知れりされは少しも母を見放さす母もし席を離るれは影の隱るゝまて目もて送るを常とし母はヂヨルヂの眠に就くを氣付けつゝ數時間枕邊に坐するを常とせり時としては不圖夢を驚かさるるとあれは母が枕邊に來りてヂヨルヂの顏を覗くまては母を索めて已まず或時母の手を握り之を己か胸の上に置きて子供の如くすや〳〵と眠に就きたるまゝ溘然として逝けり

この悲慘なる話を聽きて余は喪主の家を訪ひ金錢を贈りて助けんもし能ふへくんば慰めもせんと思ひしか聞く處によれは村人の好意能ふ丈の助を與ふるよし且は貧者は貧者同士如何にせは慰籍し得るやを知れりと思へは余は差出口を敢てせさりき

次の日曜日に余は寺に參りしに老母か説敎臺の踏段の常時の席へ行かんとて通路をよろめきなから進み來るを見て驚けり

老母はせめては子供の爲に喪服樣のものを着んとて骨折りたりと見え身に黑色の紐褪げたる黑ハンケチ其他二三心中の

愁を表する儀を纏へり余は寺に入り目を擧れば高壇の上なる富豪か死者の爲に表する立派なる楯冷き大理石の飾を見目を轉すれば年と悲もて腰傴みたる老婦か神前に傾き熱心の祈禱讃美を捧ぐるを見て余は此眞實の生きたる紀念碑は富者の惣ての楯、飾にも劣らざるとを知れり

余は此顚末を寺院に集會せる富豪に語りしに皆々大に感動し老母をして今よりも快樂に餘命を過ぐさしめん又愁傷を緩うせんと骨折りたりさりながらこれたゝ墓に入るの數歩を輕くせしのみ一二週後の日曜日には常時の席に老婦を見受けざりし而して余か此近邊を去らんとする前に聞く處によれは老母は靜に其終を遂げ哀別離苦の世を捨て良人愛子に再會せんとて逝きけると聞けり

葡萄牙の風俗、及びその婦人

葡萄牙ほど生活して費用のかゝらぬ國は有りますまい——何でも物の入りませんから。　また葡萄牙の家ほど面白くないものは又と世界の文明國にありますまい——目をたのしめるものが有りませんから。

葡萄牙の家は中々大きく、多くその後ろに玉菜の圃があります。　白い壁、板のまゝの床、木のまゝの椅子、ストーヴも無い部屋、帳も無い窓、花も無い壁、本も雜誌も新聞も無いテーブル、陶器もいゝのは無く、時計もなく、その他金目のものは更にありません。

婦人の職業には針仕事の外ありません。　その外に婦人に出來るのは會へ出るのと、井戸端會議をするのと、窓から顏を出して往來をながめる事ぐらゐです。　朝八時頃敎會へ出掛けるより外には町をあるく事が殆どありません。　男子は町の店から店をさまよいあるいて、無上に紙卷烟草を吸ふばかり、その他天氣が好ければ幾人も群になッて四つ角にたゝずみ、無駄ばなしをして遊んで居ます。　その時はみな〳〵蝙蝠傘をさして居ます。　男は冬は肩掛を掛けます。　ですから佛人英人及びすぺいん人などは甚だしく之を嘲けッて笑ひます。　これらの町々で最も大切な新奇の出來事は人の生死又は婚禮、または烟草の價があがつたくらいでそ。　若い人が夫婦に相擇ぶ仕方もまた一種かはッて居て、男が女の家の前に立ッて居るを、女は二階の窓から男を見下し、それでもはや見合ひは終ります。　無論口の利けるぐらゐの距離ではありません、この相見合ふのも。　が、たゞ一目、それて滿足するのです。

酒を飲む妻を娶て醉漢豪富となる

今は昔江戸の片田舍に丈助となんよべる農夫ありけり性來酒を好みて得る丈の金は悉く酒代に使ひ果して家には儋石の貯なし或時世話する人ありて妻を迎へけるが合卺の夕新婦丈助にいひけるは妾は性來酒を好めば毎日一合の酒を飲むとと許されよと切に乞ひければ丈助も今更厄介物を背負い込みしとは思ひしが詮方なければ乞へるゝが儘に許しけり

丈助は自ら酒を嗜むも酒飲の意地きたなく毎日妻に催らるゝ一合の酒代のおしけれども約束なれば詮方なくしぶ〳〵日々の儲の内より渡しけり、過ぐる日に關守なく妻を迎へし一

年目の日丈助は妻に向ひ
「ね松お前を迎へてから早一年になるがまだ一日もゆつくりと樂んだともない今日はお前と一所に郷里へ行つて阿母に逢ひたいと思ふのだが實は一文も…………
妻は打喜び
「良人眞然に郷里へ行つて下さるの？　それなら妾がそのお金を出しませう
「馬鹿なことをいひなさんなお前に金があらふ道理がない
「否エお金のあらふ筈はない。けれども毎日の一合のお酒がありますず
「ナニ酒がある酒がどうした何だか己にはさつぱり分らん
丈助一向に合點ゆかずお松は起て竈上にかけある地獄富を取り出し良人の前に携へ來り竹筒を割れば三百六十六日間貯へし一合の酒代三錢つゝ積て十圓九十五錢一々數へて良人に渡し
「どうぞこれで今日の入費に使つて下さい
丈助は額に汗を浮べ茫然手品師にばかされたるものゝ如く暫しは手をだも觸る・と能はざりしがやゝありて
「マアよくそれほどまでに氣を付て呉れた恭ない仇にはしませんわしや悪かつたこれから屹度浪費はしますまい。
此日夫婦相携へて母の許を訪ひ終日慰め勞はりけりこれより妻の貯へし小金は毎月預け金をなすの種となり大に富を致し田地を購ひ牛を買ひ家を建て生涯有福に暮せしといふ
かやうなお話しは下等社會の出來事で下卑たやうなれども其妻の心掛はなか／＼高尚なものあり世の中には良人の前を繕ひて竊に劇場酒食に良人の汗をもて買ひ得たる金を費す女房も少からず　世の貴婦人方かゝる不心得の女房あらば誡めたもふ時の材料にもと憚からず掲げぬ

○生徒の自炊　高等女學校教頭能勢氏が同校に於て演説されたる中に服部一三氏の談話ありとて引ける處を見れば女子職業學校にては生徒に襷をかけ前垂をしめさせて教場の掃除まで行はせる由なり。是は教場のことなるか寄宿舍の設けある女學校にては舍内の掃灑は申迄もなく自炊をもさせたきものなり近頃山梨縣尋常師範學校にては生徒自炊及び校衞の規則を實行し學校長より其意見を陳述せしめしに生徒郷竹次郎氏外三名より差出したる利害條陳書は女學校寄宿舍自炊を實施するの參考ともなるべければ茲に茨城教育會雜誌より自炊に關する分を轉載す。

炊事

夫れ人間の價値ある智識は其生活を完全ならしむるの實利的智識にして此智識有て始めて圓滑に處するを得るものなり生徒自炊の事業は即ち此等の智識を與ふるの方便中最大なるものと謂ふべし即ち第一人間須要なる經濟的の事業を實際に施行すると學問上の智識に勝る萬々なり第二自ら活計に要する價値を知るを得。第三實業的の觀念を養成し勤勞の習慣を作り第四別世界の如き學校内に在るものをして世間の事情に通ずるを得ると第五學ぶ所の簿記學を實地に應用し及獻立を作り或は調理等に付き機敏の實利を得ると第六事物に關して精密なる算術上の計算を爲すの習慣を成す第七卒業後書生的

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の生計を變じて實利的の生計を爲すを得又他の一方に於て受得する功を述ふれは次の如し第一大に自治の精神を養成す第二生徒の共和心を固む第三大に清潔心を増す第四大に器械の排列等敏捷整正の習慣を作る第五節儉の心を養成し器械物品の保存上に注意す第六物品の價値を知り且又其等の買入鑑定等に於て其注意を興ふ第七此法設置以來食事上毫も不平心を抱くものなく總て旨しとして食し得る又意に適そるもの衛生上に適するものを食し得るの快樂なり第八其他經濟上豫想外の利益ある少々あらず即ち校内に散在せる燃燒質のものは竹頭木屑と雖も風呂竈の用に充て園圃其他に餘地あれは蔬菜の類を播種し炊事の用を裨益せんとする等あり而して自炊の農業家畜の實習と關係するに至ては癈物を利用し互に相助け相利するど莫大にして互に失敗を崇らざるの幸あり

此事業に關して時間の消費少からずと雖畢竟文部大臣の所謂勤勞の習慣と作るか爲めには學科的の授業ば一日若くは數日を休むも可ありとの御主意に基きたるものにして生徒自炊法は敎育上に於て失點と認むるもの之あきを信そ

小説

繡鴛鴦

第三回 訝かしき艶書の來歴

竹の柱に茅の檐、手鍋提げてもと鄙曲に云ふ如く、好た同士の詫住居は、金の樓殿、玉の臺榭にも、勝かまして樂しからんは、云はでもの事あれど、交情好過ぎては中々に口説の起るものぞかし。

「お波早く持てお出でといふのに。」

「だから其の御書簡の譯をお聞かせあさいあ。」

「持つて行けバ解かるわ。」

「それが妾には解かりません。そして先刻からの御樣子が如何も變ですもの。」

「種々あ事を吐かすあ、愚圖〳〵せずと早く行け。」

「譯さへ被仰れば行きますけれど……何にしろ最夜此れ十時過ぎでもあるし、牛込までは隨分でざいますから。」……

「幾ら有ても可いぢやないか、それに譯々といふが、義父さんが此の書簡を御覽になれば解かる、今貴樣に話した處が、矢張義父さんに聞かあきやァ解からあい事だ。」

「ぢやァ何か愚父へ御相談あさる事でもあるのですか。」

「左樣よ。」

「明日ぢや不可ませんか。」

「不可あい。」

「何の御相談だか知らあいけれど、一寸位。」……

「えい、拘泥い。」
「それでも阿郎。」……
「五月蠅。」
言ひ出しては引かれぬが男の意氣地、無理と知つても爭そへぬが女の悲しさ、如何なる急ぎの書簡だか、其の妻さへ未だ得知らねば、作者は猶さら知るべからねど、さりとは餘りに性急な、ハテ合點はつや／＼參らず、既にして女は屹と思ひ決めたる様子にて、
「それぢや行て參ります、御返事が來るのでせうねえ。」
「如何でも可いわ。」
「最遲うでざいますから、腕車に乘てまいりますよ。」
「勝手にしろ。」
何となく角だちし言葉の端々、不審ながらも良人の意に、さからはじとてか、一封の書簡を懐にして、やがて戸の方へ出て行きぬ。
「眞個にまあ如何したんだらう、我が儘と肝癪は平時の事ながら、宅へ歸るより早う實家へ行けと云て……何だか用のあるやうな、ないやうな、肝癪とても平時のやうには起さず、と云て起さぬでもなく、何んだか妙な言語動作、不

審なのは、此の書簡、持て行て善い事やら惡い事やら、あゝ、寧そ。」……
さらぬだに進まぬ足を、とやかくに胸打ち惱まし、屠所の羊も啻ならず、折から何處の歸りにや、空車を引きながら、車夫は後より聲をかけ、
「御都合まで如何でそ、歸りですからお廉く參りませう。」
「れゝ、吃驚した、何處へ歸るの。」
「萬代橋の方へ歸るんですが……御都合まで乘て下さい。」
「萬代橋まで如何程。」
「どうで歸りですから、幾らでもお思召で可うございます。」
「ぢやア萬代橋の腕車かえ。」
「へい、腕車ハ九段下ですが、歸り路ですから。」
「然かえ、阿儂はね牛込の赤城下まで行くのだが、幾らで行て呉るえ。」
「さうですね、赤城下までは隨分御坐いますからなア、ぢや斯して下さい、何にも構はず十錢と。」
「十錢ぢや高いよ、是處から仕立ても其の位なものだよ、七錢におし。」
「ぢやア仕方がございません、八錢にして置きませう。」

「一錢のハマリか、よしよし。」

思ひ內に餘りても、色外に顯はれても、流石に金錢の出納には、拔目內儀の取り廻し、吝嗇なやうなれど大いに然らず、一家を運轉る內儀の經濟、いづれ斯てぞありたけれ。斯くて十一時過ぐる頃、漸やく牛込なる赤坂下に到り着きぬ。

「車屋さん、下して呉れ。」

「此家ですか。」

「あゝ。」

つと身を起して腕車より下り、約定どほりの價を拂ひ「大きに御苦勞」と云ひ捨てつゝ、衡門を潜りて玄關に至れど、早寐しづまりしにや、寂寞として物音せず、

「お賴み申します、お賴み申します。」

二聲三聲おとづるれば、奧の方に聲ありて、

「誰何。」

「淺草の西鳥越から參りましたが、此戶開て下さいまし。」

「鳥越から、そんなら何か、お波か。」

「はい、如何も遲く出まして。」……

戶內にはマッチを擂り付ける音せしが、間もなく洋燈を照して出て來り、戶の鍵を外して、瓦落利と開け、

「如何して今頃來た。」

「急な事で。」……

「まあ／＼這入れ。」

個は是れ此の女の父親なるべし、先女を戶內へ入れ、故の如く戶締りして、さて奧へ伴ひ行き、

「如何したのだ。」

「慈父さん、大きに御不沙汰致しまして。」

「まあ挨拶は如何でも可いが、如何して今頃來た。」

「何だか妾にも解りませんが、今夜交替して歸るや否や、服をも脫かず机に向ひ、此の書簡を認めて、是非今夜中に慈父さんの處へ持て行って聞きませんので、何だか樣子が變なやうですから、種々と其の譯を聞いても、只慈父さんの處へ行けば解るって聞かせませんし、それに肝癪持ちですから、逆らつても可くないと存じ、仕方なしに今夜參ッたのでございます。」

「まだ直らないかな肝癪は、それ其の書簡をお見せ。」

手に取りて封おし切り、讀み下す其の文言は、

拜啓今夜隅田の堤を巡回致し居り候處、圖らず別封の艶書を拾ひ候、波義は平常まめ／＼しく働らき呉れ候らへば、

まさか左樣な事はと、幾回か思ひ返し候らへども、何分にも別封裏書の姓名は、彼に相違之なく、其の上昨年以來毛絲編物等を習ひたしその事ゆゑ、或人の周旋にて、さる西洋婦人の處へ通はせ候處、近頃ハレースさへ覺へ候、然るに別封のレース等、彼れ此れ思ひ合すれば思案の外のいたづら事も、穴かち無しとも言ひ難く候、殊に其の西洋婦人の夫何かしはある止んごとなき北の方に、毛色のかはりし子を生せたる抔いふ風評さへ有之候へば、猶更疑しく存じ候、何卒御推察の上、同人義御引取下され度候匆々不一。

四月十四日夜　　柳川翠

春日井麗左衛門殿

讀み了へて、親も子も呆れたるまゝ言葉なし、抑此の結句は如何なるか、馬琴曰く、「开は又後回に說き分くるを聽ねかし」と、作者此の篇に於て亦云ふ。

寄書

地久節につきいらつめ方に申す　法學士　渡邊輝之助

こたび「いらつめ」にはかしこくも皇后の宮の御德を稱へ御生誕の五月廿八日を地久節とし天長節と同くし祝ひ奉るため別段に祝賀の附錄さへつけ加へぬ、皇后宮の御盛德の數ある中に女子の敎育にひたすら御心をそゝがれ玉ふは中々にありがたくも又恐れ多きことならずやかゝる御盛德に報ひ奉るはいらつめ方はいかにあすべきや

大政古に復りてより制度文物の盛にある古來未だ我朝には其の例なく殊に女子の學藝は著しく進み和漢洋の學文は勿論裁縫編物音律等の技藝に至るまで一ッとして備はらざるはなしかくの如く學藝の盛にあるは目出度き事の限りあれどこれは智育と稱へ必すこれに伴ふべき德育あり智育は末にして德育は本なり智育の德育より進むは國に害あり德育の智育にまさりて進むは國に害なし德育と智育は車の兩輪の如し德育と智育は相伴ふを要す彼の「ローマ」帝國は古より文藝（智育）の盛なるも道德（德育）の衰へたる故に國逐に亡びぬ今我の有樣は文藝は日々に進むも道德は日々に退き殊に女子の智育と德育の間には甚だしきへだゝりあるは嘆かわしき事にあらずやされば學識高く技藝に秀でたるやんごとなき姬御前のあられもなき噂の數々聞ゆるは抑如何なることにやいらつめ方は御身を脩め行を正しくし他の鏡となりて一人より一家一家より一國と日本固有の高尙にして優美なる女德を

鑑にして智育と德育と相伴はしむるは即ち　皇后の宮に報ひ奉る所以なりまして民法の發布も近きにあれば人事偏に女子の身分權利義務の定まるものあれば今日に當り女子の盡すべき事ハ中々に重し

かゝることはいらつめ方の疾にも知り玉ふなれど地久節の祝賀につきいさゝか思ふ所をのべぬ

如電居士に與ふ

うるさければ冐頭ハ略しぬ、扨ても琴水ごの先日のいらつめにて申しゝ先生が小說に付てのくだ言に付き御叮寧ある御答辞下され候てそ有難う拜見すれ。さりながら琴水が御尋ね申しし事柄に付ては少しの御答も無之て、却てものし玉ひし大意とや例旨とや、琴水が耳にうるさき程入けん言葉事新う先生より聞く古の作者も今の澤山の小說家も其爲す業主旨とし問へは、大抵は先生の意に外ならすとこそ答ふへし。琴水が淺識なる未た世道を益し人心を裨せんとて身を管城子にゆたねし人、もしくば、とある小說にて世道人心を益せしもの一向承知も致し侍らず。されど先生の御主旨は只變化の妙を示さんとての御作とか、如何なる何の御變化を示し下さる御事やら欠伸ながら待居候、如何に「嘘から出た眞事と御覺されんも本道らしき嘘と見做されんも……と」云ひ玉ふとて嘘の大阪語にて眞事と見るは、かたかり〳〵。意匠を含めでの御答辞女史か忠告に服せんとの御一言それにて女史も滿足しぬ。嗚呼先生は妾は尚年少のものにてそ此度の事を能き待祈已后愛顧し玉ひてよ。

琴水女史

如電先生

もとへ

懸賞文藝

第二回懸賞題　春の野遊

文章の分

春の野遊び？　聞くばかりて早氣がうきたちます早優美の觀念が浮びます。其春といふ語は花のやうな語で、美しくてしかも香を含むで居るかと思はれます。其野遊といふ語は長閑な面白さうな語で、丁度霞に取まかれて居る樣です。　春の野遊び？實に古へから、幾ばくの詩人歌よみの腸を斷ちましたらう

幾ばくの佳人才子の情緣をつないだでしやう。 九重の雲井わたりの大宮人でも、針目衣を身にまとふ賤の男でも、一切平等に笑を呈して迎へる者は春の野です。 御覽なさい爵位ある人高貴なる人にも春の野は特別上等の席れ設けません、否むしろ車輪や馬蹄のために、其風光を荒されるのを厭ひます。「何事ぞ花見る人の長がたな」、それと同じ事です。 春る野遊び―― これと思ふと、一体の田舍の景色が見る〳〵眼前に浮びます。 物心を覺えてからこのかた經歷した野邊山邊の景色が、一團となつて畵いた春を見せます。 遠くに見える山々は、一体に霞に包まれて、ベイルの美人とも許せましやう。 其麓に連なる森があつて、そして處々に草葺の屋根や瓦屋が見えます――耻かしさうに首ばかり出して居ます。 重なる山は前の方は翠緑の色が滴るやうで、後ろの方のは紫の色がこぼれさうです。 其紫と空の薄青との配合其下に見える耻かしそふな森のなかの家々。 實に詩人や畵工の食ものです見れば靜かに田中の小道をたどるものがある、其首は思案の重みに押されて傾いてゐる、 詩人? ろふらしく思はれます。 糸遊のきら〳〵きらめく中に蓮花艸やすみれは田畦とも言はず道ばたともいはず一面に花を咲せてまるで美い花毛氈を布いたやうで坐らずに遠くで見て下さいと言ひさうです。 不意に笑ひ聲、これに續く一群の男女、摘菜籠をさげて居るのは若い婦人で花束をこしらへて居るのは稚い乙女です。 此中には乾度他に超へて、餘念なく愉快なものがあるでしやう――少なくも一對は。 あら無慘―― 櫻の一枝。 今朝は朝日の光りに露を帶び乍ら、倭だましいを匂はして居たとも思はれる櫻の一枝。 誰がまア無情にも棄たのでしやう? 棄てやうとて折る者もあるまいに。 見れば其處に薪を荷ッて行く山がつがある、 まき束の則にく〳〵りつけられて…追々遠ざかりますからほのかにしか見えません。 ぼんやり白く見えるのが、あれが不幸にも取り落されて危うく馬蹄の塵とならうとした一枝の同胞です。 容赦もなく荒繩に縛られて手活の花と眺められに行く花です。 折るものも折る者です。が、眺める者も…左樣さ…自然のまゝを眺めて賞美したなら嘸かし花神も本望でしやう、 折る者も殘酷な罪人とはなりますまい。見て居る中に山樵は花を荷ふたまゝ霞の幕を後楯にして隱れて仕舞とは、首を傾けて居た詩人も、一群の男女も、はた樵夫も皆去つて今は眼界に遮ぎるものはありません。 長閑な春の野の景色、靜かになるほど暖かい日光。 かかる暖かな日

には、えて牧童などが艸かりに出るものです。　あら？　來ました、――　噂をすれば影とやら――　牧童は二人まで。　一人の兄と見ゆるは艸籠を荷ッて、その籠には砥石と鎌が二挺見えます、弟と見ゆる一人は前に牛を逐ふて居ます。牛はやがてそこらの杭に綱を長く結ばれました、頭りを尾と掉て居るのは、まだ春――　動もすれば寒からうといふ春ですから蠅を逐ふ爲でもなくて、蓋し嬉しさをあらはして居るのでしやう。　兄弟は牛の艸をくふのに餘念のないのを見て艸かりに着手しました。　其二人睦ましげに笑ひ興じながら互に活潑に仕事するを見れば、善良な親睦な兄弟といふことは言はずとも知れて居ます。定めて両親にも從順なでしやう、又朋友にも信切なでしやう。　人爲の春を……少なくも一家内に人爲の春を作る者は實に彼等です。　牛は草にあきたか、ウモーといふ其うなり聲は兄弟のものに告ぐる所あるかの樣で、兄弟もまた籠を充たし得ましたから、以前の通り兄は籠を荷ひ弟は牛を逐ふて、ろう／＼家路にかへります。　跡はまた悄寂寥――　面白い靜けさ。いや、さうでもありませむ。今迄は食餌を求めて居たのかさッぱり聞えなかつた雲雀は、たまげたやうに一ッあら二ッ三ッ四ッ同時に鳴き乍青空のあなたに昇りました。　いて美妙な音樂？　ても優美な調子？　靜にその天外から來る音樂と此面白い景色の中で聞くときは、さて精神の潔白にならぬ者がありましやうか？　これでも――此時に當つても――　なほ肉慾の奴隷となり煩惱の命令に屈する者がありましやうか？　見れば此音樂につれ舞ふ蝴蝶もあります、躍り狂ふ狗の兒も二三匹これを鹿鳴館の夜會にくらべて、其高尚なことは果して幾ばく／＼でしやう。　優美とか高尚とか美術の心髓を得やうと勉める人も隨分多い中に仕遂げたは愚か近寄ッた者も眞に稀なのは畢竟卑淺な劣情と榮て得ぬからの事です。　兎角する内優さしい蝴蝶は花を求めて去り勇ましい狗兒も互に逐ふて何處へか行きました。たゞ姿ない天外の聲は消えません。　想像のうちに消えない聲は今は實物の鼓膜を動かしました、よもや……と思ひ直す理屈もありません北窓を推しあけてそして綿のやうな、空を見上げると微かながらも姿を見認めたので、想像の野遊の中にこれ斗り實物の春を見せたのです。夢心地を破つて、はてしもないさまよいから私を引き止めたのもこれです、此の美妙な優美な音樂の自得者――　雲雀です。

社評　讀んでも讀んでも飽きない御作、今度の雛

實文藝の中の壓卷です。一々褒め立てれば盡きませんが、末段の雲雀の御趣向は何とも言ひやうが有りません。秀の極、美の奥、實に千金の意匠です。

右一等賞…………靜　觀　山　人（東京）

この頃の空いとうらゝかにして吹すぐる風にも長閑けき色見ゆる春の野邊に思ふどち打ちむれて遊ばむたのしさにはをさ〳〵くらふべきものもなむあらず。幾日にかありけむ、四日五日まへ花をあさりて友よぶ鳥の聲に空ののどけきさま推はからるゝ午すぎ、近きわたりの女の子三人ばかり音信れきてそこらの野邊によめ菜つみてむ、諸ともにと言はるゝま、父母に申し請ひて打つれたちて出で行きぬ。わづかに里を放れてや、野になりければ連の女の子等は田の畔、みちのべのえらみもなく、己かしゝ下もえそむる若くさのうちに嫁菜つむもあり、薄氷とざせる小川の岸にせりあさるもあり、笑ひさゞめきて餘念もなし。見渡せば春まだ淺きうす霞たちそめて遠山のみどりうつくしきこと得も言はれず、陽炎のいとさへ見えてゆら〳〵とみだれつゝ身には吹くとしも覺えぬ春風をなびく青柳ともにしらせがはなり。見れば池の面にさゞ波のみえて石間にかくるゝ魚の二ッ三ッすへて寒けなるもをかしく、あなたの岡の上なるは誰がすまゐにや垣ねに白きは雪ならむ樣もなし、さりとて櫻にはなは早かり、「梅のはな咲ける岡べに家をれはともしくもならす鶯のこゑ」など口ずさめるもののあるへし。あな面白き春けしきよ人の心はさま〳〵にして其の面の如しとは言ふものから此のけしきを見てはいづれか眉をひらかさらむ。實に齡をのぶるてふ藥は春の野遊びぞなど思ひつゞけて佇みたる側に女の子等はみなつどひけり。「穫物のいと多かるに見玉へ」とて籠さし出しぬ。「いみじうこそ。いざ我等も共に」などいふ折しも、彼方よりうれしげなる笑ひごゑしてまづ呼びかくるものは平生にもの學びにとて同じ學校に通へる友どちなりき凡そゝ七八人もありつらむ、衣裳もきらびやかに、何くれと粧ひたれ目もあやにて春まだ寒き野邊に都の錦たりなせるこゝちせりともかくもはからずして同し野邊に逢ひぬることうれしさの限りしられず。かゝるためし古へもありけむ。「自から花にてころのうち合ひて契らぬ友のむれし野べかな」と古人もよみたるぞかし。

かくて皆々もともによめなつみ、芹とらはやといふまゝかし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ことに分れもし、此處にあつまりもしつゝ「今日は休み日の空さへ麗らかなりければ梅の花みむとて扨こそあくがれ出でたれ今は其かへるさに侍り」。「見にやおはしけむ見せにやおはしけむ」。「あな人にこそよれ」など打戯れつゝとかくするまに籠は充ちぬと女の子等がいふ。さらはとて腰うちのはしつゝ吾影はふしの長やかなるに、驚ろきて顧り見れは、さすがに長き春の日もはや夕暮になりなむとす。今日はこれまでにことて女の子らをさきに立てゝ道すがら笑ひ興じて、已かしゝ家路たどりて歸りけり、かへりてのち女の子等はつみ菜見せて父母にはてりしなるべし、己れは女の子等が年たけて文よむすべ習ひし時示さばやと思ひ、忘れぬうちにとて思ひ出づるまゝをかいけつぬ。

ながしとてあめにかこちし春の日の野べにはいかにみじかかるらむ

右一等賞……………松木よし子

昨日までふりさけ見にし白妙の峯に積りし深雪だもいつしか消えて痕もなく、世外の佳人とながめつる澗間の梅も散りはてゝ、短き春の夢と過ぎ、池塘にもゆる若草は誰が思ひを染めいだしてか緑濃く、霞たなびく遠山は美人の黛を描くにや煙りを籠むる青柳は公子の馬を繋ぐらむ然れは誰誘ふとにはあらねども、自と心のうきたつにぞ何れにか杖を曳き一目の春を偸まんと心のあへる友垣共打連て近き野邊へと趣きぬ。衣を拂ふ風さへ長閑にして心地よく、咋夜まで空しき枯野と見てにしも、今朝は早や錦の城と變りつゝ、種々の花共我劣つしと咲乱れ、酔へる桃花に、井める梨花。彼面に山櫻の風に靡くなれば、彼面に杏花の露を含むあり、濃染自妙それぞれに今をさかりの其さまは煙李夫人の影を鎖すにあらざれば月西施の面を遮ぎるにや。柳の陰にさへづる鳥の音は緑に聞きなされ、花の外に吠ゆる犬の聲は紅なるかと誤たる。右の方は見渡すかぎり麥の畝と菜の花の畝にて、緑立つさゞ波の間に鳴く雉の聲もをかしく、黄の雲に映らふ蝶の衣も輕げなり、左の方は一面平蕪にて、或は紫雲英蒲公英など自然の氈を織出し、春の少女の幾隊か籠を提け柔き線を踏み、これらの草花を摘み居るなど其自然の趣き是に敷島の歌人の詠むともつきじ唐詩に賦しも得あらじ、畫くともなど寫し得ん其風情それより或但村落に出づれば茅の檐とも立並び、質樸なる野人らは烟を吹きつゝ三々五々團欒なし、或は君が代の御德

を稱するもあり、或は孫の自慢話に餘念なきもありて、石上古りにし御代の事さへ思ひいでられて床し。あら麗しく咲ける花、樂しく鳴く鳥、すべて君が代の太平無象の象を寫しいだすにあらざるはなく、此長閑なる春の野邊こそ君が代のよき寫眞と言ふべけれなど感ずるまゝ、花の露をば硯に受けて月な燈に此くなんしるし侍りぬ

右二等賞…………………江藤龜六郎(大坂)

通信問答

田舎娘さまへ　和歌、唱歌などの作り方は次號から出します。

Violet さまへ　(一)煙筒に火の入つたのを防ぐには、もし家が西洋づくりなら手早く窓や戸を閉ち、烟筒の下口を閉ぢて置いて上から水を注込むのです。又別法は火の入つた烟筒に硫黄を手に一杯つかんで投入れるのです。火は忽ち消えます。(二)ストウ女史はアンクル、トムス、カビンの作者です。

高橋たか子さまへ　(一)手足の荒れるのを治すにはよくリスリンを塗るに限ります　(二)疊についたインキは大抵鹽をふりかけ、烈しく擦つて拭ひ、やがて更に熱湯を掛けて拭ふ此法を手早く幾度もすれば大抵取れます。(三)西洋人の婚姻する年齡は大抵男子は廿五歲以上、女子は廿歲以上です。(四)すべて虫類を寄せ付けぬための藥をある書物に斯う載せて有りました。「黑胡椒(粉の)小匕に半分、赤砂糖小匕に一杯、及び乳酪大匕に一杯、これをよく交ぜ合せて器に入れ、虫の來る所へ置く、そうすると虫は皆逃げてしまふ。」(五)小兒の夜泣は多く乳の飲込やまたは晝間の寢込から起ります。それでこれは習慣となるものです。それ故之を治すにも習慣で次第に治すのが第一の手段です。(六)湯垢は重に強い鐵で削り落すのです。(七)日本にはじめて茶の來たのは源平の頃榮西律師が支那より歸朝の際持歸りしものと思ひましたが確に覺えず其年月等委しきは次號にてお答いたします

かよ子さまへ　(一)眞菰の灰は大抵手製に爲ます。どちらかと言ふと毛生藥には黑燒の方がよろしいです。(二)玉子のきみ鮨及び玉子豆腐の製法は生憎知りません

Miss Yoshi へ　疣は硝酸銀で取れます。其法、硝酸銀を一寸疣の上に觸れさせるだけです。直に取れます。

松田うめ子さまへ　(一)玉子の腐敗するのを防ぐにはアラビ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ア護謨を濃く鎔かした水を殻よよく塗るでのす。　（二）飯の腐敗を防ぐよ酢などを入れては味を損じます。　すこし味はわるくありますか磨だはかりで無いのを炊ぐか、または釜底や釜厚に接した處のを早く食べて仕舞ふか、これらを行へば腐敗れ免かれます。　（三）、及び（四）、御たづねの意味がわかりません。

ふぢ子さまへ　鼻の低いのはどうも高くなりません。

小すがさまへ　（一）黒繻子について襟垢を落すのは此號のはじめ洗濯法の中よある第七項、「絹についた油のシミを落す」とある法を御用ゐなさい。　（二）香水を製する簡略な法は香の有る（好次第）植木の花或は嫩葉を摘み、奇麗に洗ひ、アルコール（でなければ燒酎）の中へそれと同じ量ぐらゐ浸し瓶を密封し、土中よ埋めて置いて、半年乃至一年ぐらゐ經て後取出して用ゐるのです。　（三）牛乳は大抵の人に害をしません。

中山さく子さまへ　六七歳の小兒が朝寢をするのは最早時間と定めて起して差支ありません。　が、あまり早く起こすやうよ定めてもいけません。　これよりも幼年の小兒をば全く寢たまゝにして置いて、決して叨に起さぬのが宜しいのです。

淡路町のきん子さまへ　人情小説で文もかあり、また趣向も劣等でなく、そして六ヾかしくないものは先づ Lord Lytton's Eznest Maltravers Goldm it's Vicar of Wakefield, Washigten Brving's Rip Van Winkle, Scott's Bvanhoe などです。　是等ハ讀んで害よありません。　いづれも東京の書林よあります。

中山ゆみ子さまへ　（一）齒磨は鹽酸加量製の物が最上です鹽酸加里製かどうか試みるよハ火に入れて見るのです。　齒磨が燃えれば即ち鹽酸加里のあるしるしです。　（二）これはよく調べてから御答へ申します。　（三）紫粉三、アラビア護謨二、および水五、この割合で混合せて出來ます。

ときはさまへ　（一）女の名の下よ「子」を附けるのは古い事で、既に式子内親王などの名もあり、また栗子などの稱もあつた程てす。　（二）富貴豆の製法はまづ蠶豆を湯出、皮を剝き、目籠よ入れて、そのまゝ煮上げるのです。　攪回すと形が崩れまそ。　（三）物を貰ふ事を「無心」といふのは「虛心」といふ譯で、すなはち「通常ならばそのやうな事は言へないが、こゝは虛心で（心を虛しくして）望む」といふ意です

吉岡筑子さまへ　酒を嫌ひにさせる法はわかりません。

高等女學校一生徒さまへ　（一）此頃舶來したグリーヤーの化粧石鹸（Gleaver's Glycezimeand Almond Soap）は色を白くするのに尤も好い品です。此石鹸は大抵の大きな唐物屋には賣ッて居ます。これを用ゐてまた硼砂の湯で顔を洗へば色は必らず白くあります。（二）ニキビを去るのに即効の藥をおあづけに載せなかつたのは即効にすると却ッて身体の健康に害の有る故です。第一の法を御用ゐなさい、乾度ニキビは防げます、また治ります。（三）日に焼けたのを白くそるにはレモン液を些計り手に滴らしてそれて顔を擦り、清水で洗ひ落すに限ります。日に焼けるのを防ぐのも同様の手段で出來ます。

第二十二號餘興新謎の解

（一）酒に割る水

（二）一番頭の大きな方です（頭が大きけれは帽子も大きくあります）

（三）兵卒

（四）遠江伊豆に志摩飛騨

（五）さくら

（六）門（用にあるにはキがたりぬ）

皆點者　高橋喜太郎○佐藤新吉○吉田かつ子○梅澤仙太郎○佐藤あさ子

五題解當者　竹内さた子○近江えん子○齋藤渡○高澤政子○後藤しつ子○福田つる子○近藤喜一郎○加藤四郎○岡山ひで子○山川いる子○若林みさ子○脇秀造○小山田みち子

月報

○皇太后陛下美術展覽會へ行啓　皇太后陛下には去る四月十八日午後第三十分青山御所御出門上野美術展覽會へ成せられまづ休憩所へ御着御飾付並に御巡覽の順序等は總て前日行幸の時同様本會員諸女史及女子職業學校生徒の席上畫あり餘興には三四の合奏紅葉館雇女の舞踊等ありて午後五時頃還御あらせられたり

○皇后陛下にも　同二十二日午前九時御出門にて同會へ行啓あらせられ會頭佐野子爵の先導にて御休憩所へ着御會頭より本會掛員人名錄出品目錄及ひ日本美術協會の設立人名錄を奉呈し尋て御休憩所二の間に出御會員婦人の席畫を御覽直に列品場に臨ませられ北館より第一第二の古物及第二第三室の新製品を御巡覽第三室に於て會員の彫刻術を御覽に供し畢て御休憩所へ入御御晝餐午後南館の新畫を御巡覽御休憩所二の間に於て歌舞等を御覽午後六時三十分還御在らせられたり

○青山御所の養蠶　青山御所内の養蠶場にては本年も例の通り養蠶ある趣にて此道の人八名と手傳人二十名を御雇入になり既に右に着手せられしよし

○生徒の洋行　東京音樂學校生徒幸田ふさ子（十九）は同校に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

於て最も優等の生徒なりし由あるか此度音樂修行の爲め三ヶ年間留學を命ぜられ已に出立したる由

○慈善音樂會　東京盲啞學校維持の爲去る八日の夜東京高等女學校に於て岩倉公、佐々木伯、榎本、青木、大村、山尾諸子、長岡男爵の夫人及渡邊、辻、澁澤、大倉、諸氏の夫人高等女學校教師プリンス令孃が催したる慈善音樂會は近來音樂會の多きにも拘らす盛會を極たりと其景況を記さんに奏樂塲は同校講堂にして四方には緑葉を飾り之に造花を點綴し其正面には同羅馬字を以て邦語惠みの語を表し天井は紅白の木綿を以て飾り口々には國旗を交叉したり又た電燈をも欺くへき大空氣ランプ四個を釣るしたるは日米貿易商會より好意を以てプリンス令孃に貸したるものなりと云ふ同塲の裝飾は同令孃の意匠に成りし者のよし但塲内中央に岐阜提灯四個を釣るしたるは内外賓客の批評を異にする所あらん偖同會は午後八時の開會なるに六時頃より續々來塲者あり開會の頃は滿堂立錐の地を餘さすして無慮七百人發起の諸夫人は勿論高等女官十數名榎本文部大臣、辻文部次官、渡邊大學總長、鍋島侯爵、山尾子爵、英蘭、葡、清の諸外國公使、曾我中將、大築少將等も見受たり奏樂は十五番にして終りに盲啞學校啞生吉川金造は口頭にて謝辭を述べ最後に式部職諸管絃を以て終と告けたりしか孰れも其道の達人なれは聽衆を感せしめぬは無かりし中にも音樂學校教師ナッドリヒ氏のバイオリン演奏は絶妙にして拍子喝采暫く止ます同氏をして再演せしめたるは同氏に取りての榮譽と云ふべくアレン令孃が僅十二歳の妙齡にして大衆中恐縮の色なく獨唱せる如きも感服の外なく山勢松韻氏と共に盲生四名の彈等は當日の興りものにして本邦婦人客の耳を喜ばせしものなり又啞生吉川金造の謝辭を述べしを聞くに明瞭に聽取り得られ群集中不思議に驚き教育の功を稱するの聲塲内に滿ちたり文化の德澤盲啞に及び其功著るしきを見ては慈善家も滿足せしならんと云ふ

啞生吉川金造の謝辭　私は吉川金造と申し東京盲啞學校の生徒でありまます今晩皆々樣が私共の學校の爲に此會を御開らき下され有り難く存じまして一言御禮申上げます

○山川勝子院略傳　去る四月二十二日遠逝ありし山川勝子院は陸軍少將山川浩氏の母堂にして舊會津藩士西郷近登之の女あり幼にして穎異夙に孝女の名あり長して山川重固氏に嫁す舅姑艮人に事へて孝貞至らざるなく闔藩之を賛美せり後ち三男九女を生む年四十四の時艮人遠逝し子女皆幼少末女捨松子の如き僅に一歳なり夫人之を撫育して夙に起き夜に寢ね子女の教育に從事して辛苦至らざる所なし明治戊辰の役起るや夫人慨然として云く婦女の頭髮衣服を裝飾するは治世の事のみ今や國家存亡の秋なり女子と雖も悠々安居すべきにあらずと女子に訓誨して釵釵を賣却し戰資を助けしむ尋て籠城に際し負傷者の看護彈藥の製造等凡百の事率先して之に從ひ夜を以て日に繼き倦勞の色なし既にして國破れ君臣東西に離散し陸奥斗南に移住するに及んで其艱苦云ふべからず人或は其辛苦を歎く夫人勵まして云く人の手足を有するハ自活するか爲めなり豈に人に依て生計を營むへけんやと自ら採薪機織の勞を執て家事を助け毫も屈撓せす曾て藩士木村某其生計の立ち難きを歎ず夫人云く蜉蝣たも猶生存す豈に人にして自活する能

はざらんやと木村某其事に感じ終に生計の道を立るを得たり後其庵に掲くる和歌を請ふ夫人之に題して云く

中々に人は人をもたのむ哉
ひを虫たにもみをたのむよに

斗南に在りて以爲らく方今の世尤も女子の教育を忽諸に附すべからすと四子五女をして漢學を修めしむ時に斗南に洋學を教授する者なし偶ま浩氏藩用を帯びて函館に趣く五女捨松氏を携へ佛人某に托す明治庚午の歳夫人黒田開拓次官（今の内閣總理大臣）が海外留學女生を募るを聞て大に喜び曰く是れ妾が宿志を遂るの秋なりと即ち末女捨松子（時に十一歳）を以て之に應ず本邦女子の海外に留學するは實に之を以て嚆矢となす其後夫人は平生讀書を以て消閑の友となす故に正史野乘稗史小説伺はざるなし又古今英雄閨秀の事蹟を談するを喜ふ夫人性謙讓村翁野娘と雖も能く懇篤を加ふ又勤儉を守り常に粗菜を以て膳に備へ自ら奉する甚だ薄し他の尊大自ら喜ふ者若しくは奢侈豪華の輩を見ると蛇蝎の如し夫人少しく酒を嗜むと雖も毎に子弟青年輩を戒めて云く卿等苟も社會の用を爲さんと欲せば宜く飲量を節すへしと然れども祝辰若くは置酒會宴の時には團欒獻酬の中に交り其客交も談笑醉舞謳歌の態を見て樂となす其節操寛量概ね斯の如し本歳四月十九日病に罹り二十二日享年七十三歳を以て終に沒す夫人腹中に塊物あり積年之を患ふ常に云く妾は此塊物の爲に命を落すへしと沒するに先だつ三四日偶然和歌を詠す

我なからいかに名殘を惜しむらん
思ひおくへきこともなきよに

且云く妾の病少しく發するも劇痛を覺ふ死に瀕しての苦悶は期する所なり辭世の如きは詠ずる能はざるへし豫め詠じて辭世と爲すと子女現存するもの陸軍少將兼高等師範學校長浩氏次子理學博士理科大學教授山川健次郎氏長女高等師範學校女子部舍監山川二葉子次女櫻井氏に嫁し三女宮内省奏任御用掛山川操子四女の婿始審裁判所判事山川德治氏末女陸軍大臣大山伯爵夫人捨松子あり宜なる哉此夫人にして是等の子ある夫人の如きは古賢に愧ざる賢夫人と謂ふへき耳

○中川昇氏　銅版を以て有名なる仝氏は三月中より不幸にも紙幣贋造者に關係ありとの嫌疑により宮城監獄へ拘留せられしが去る四日愈放免せられ青天白日の身とぞなられたり

社告

附錄は織田信長公より木下藤吉郎の妻女に遣しゝ手簡の寫にして全文の三分一です次號に出しまする三分二は此手簡の骨髓ですから續て御覽を願ひます

地方の愛讀者諸君中雜誌代價延滯致居候分は郵便を以て御催促申上再三に至り候へ共尚御拂込無之方有之甚迷惑に付至急に御拂込被成下度若等閑に御捨置相成候はゞ無是非紙上にて御催促可申上候間左樣御承知被下度候

會計掛　敬白

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●●●速記彙報●●●

毎月一回發行●●第六册五月十一日發行●價郵税共一部金六錢六部前錢三十四錢

目次●グラッドストン氏ノ速記術ニ關スル演説●
筆記譯文●日本往時ノ速記術 萩野由之●帝
國議會書記官ノ資格ヲ論ス 日東居士稿●源綱紀
關直彦氏より贈りし書翰●一箇月間卒業の評●新演説を讀む 柳堂仙史●元
老院の吏員速記術研修會を設く●速記之秘術●速記術を學ぶ者の讀むべき雜誌●速記術の雜誌●東京
府下の速記演説會(第五回)林茂淳講述●外數件●道中膝栗毛●速記術講義

●附言●第六册の字數前册よ幾んど倍す●(廣告料)一行五號活字二十三字詰前金五錢

(發行)〔大賣捌〕

東京神田區裏神保町一番地
速記彙報發行所

東京神田區裏神保町 敬業社

師範女生徒召募廣告

東京高等師範校女子部授驗生此期入學濟之者有之尙二十五名ノ寄宿生ヲ召募ス志願者ハ至急申込アルヘシ 但地方ヨリノ寄宿生ハ從前ノ通リ該校ニ於テ一切保護ノ責ニ任ス

○年齡○從十三年至二十年
○學力○小學高等科卒業者及同學力ノ者
○學費○授業料金一圓食費金三圓

東京小石川區小日向臺町一丁目五番地

長榮女學校

貴女の友第五十三號

改良減價

目次

論説 美術側面の觀察。私立高等女學校の現況(つゞき)。「國のもとひ」の中正とは何ぞ

學藝 和歌。俳句。英語の事(つゞき)。日用智識(つゞき)

叢談。夜常演藝(つゞき繪入)。四季の景物。髮洗ひ水。毛髮生へを催す藥。衛生料理。惡少年(つゞき繪入)。考物。

寄書 たのーみ

新報 十數件

廣告 數件

一部五錢

發行所

日本橋區本町二丁目三番地

東京教育社

琉球淨瑠璃

市川團十郎題辭
美妙齋主人序
琉球俳優宇良小樽校
大森惟中跋
琉球喜納弘校
松山いろは評釋

●定價二十錢
●運賃六錢

琉球の言語を知るべし、文章を知るべし、俳優の狀況を知るべし、劇塲の摸樣を知るべし、演藝の体裁を知るべし、其他琉球の歌舞伎狂言に關する事柄は細大漏さずこを知るを得べし

東京本郷區西片町十番地

いろは家

遞信省認

いらつめ第二十二號目次

挿畫
- ファンホフェル作人局
- ケップス作無心の小供
- 流行の見本
- 色々の影畫

社說・地久節

家政
- 甘諸百珍〇〇いらつめ料理●梅酒●椰水●親子揚●肉を鑑定する別法……小豆を速にやはらかに煮る法……干鮎を速にやはらかに煮る法……魚肉を骨まで軟に煮る法●●筍を貯ふる法●〇魚鳥類の漬様●〇精進煮汁の法●●看病法一斑●親の眼〇烟むる臨を直す法●長生の法

小說・狐鴬第二回　翦亭飯人

論說・婦人の從順

文美藝術
- 和文の變遷　新保磐次君
- 日本美術沿革史（漆器の部）　美妙齋主人
- 隣の春　美妙齋主人
- 月花見立　闌みな子
- 櫻狩●●●東台春夜●●●口畫の解
- 日本の俗曲に付て　おもしろ樣藝仙
- 柳櫻都錦繪（二幕目）　立花家かをる

流行
- 流行見本挿畫の解――（第一）テーブル掛ぬひとり模様●（第二）掛針さし●（第三）端のぼり鯉の根掛〇小柳の帶の色合……厚板の帶

雜纂
- ばびろんの奇風●●結婚の心得
- 女子の教育（拔萃）　加藤弘之君

寄書
- いらつめ方への御忠告　琴水女史
- 琴水女史に謝す　知電居士

餘興・懸賞謎●●●●春雨遊（舞ったく）興く

通信問答
- 毛を生す法●日に焼けぬ法●レモン入の石鹼●黑い肌を白くする法●鼻がつまるのを治する法●上等の鬢附さ梳油さ白粉さ白粉下●假名づかい獨修書●日本語字引●家政學の書物●育兒法の書物●西洋料理さ婦女衛生の書物●縮れ毛を直す法●散步の仕方●齒痛を治す法●火藥の製法●鍍金法●子供のよくできるとき●簿記學の書物●手輕染物法●鉄物のカナケを去る法●肉色を薄紅色にする法●肌をなめらかに白くする法●茶の利害●煙草の利害●血止法●齒齡の眞否を知る法●汗を止める法●菓物を貯ふる法●衣類ユインキの附きたるを落す法●和文を修むる法●赤色を黑くする法

懸文賞藝
- 第二回の賞を得たる文と歌
- 第三回の新題

	いらつめ		
發兌	毎月十五日ユ發兌すへし		
定價	一册八錢	半年（六册）四十五錢	一ヶ年（十二册）八十錢
郵税	一錢	六錢	十二錢
合計	九錢	五十一錢	九十二錢

郵便爲替　郵便爲替は拂渡局名欄内ユ（神田郵便局）と記し受取人欄内に（神田駿河臺南甲賀町八番地成美社）と御認め被下へく候又郵劵代用は郵便爲替の無き地ユ限り一割増ふれば妨ふし　但し一錢切手ユ限る

見本　見本一册入用の方は一錢郵劵九枚にて發送可仕候

發行兼編輯人　山田武太郎　印刷人　佐野忠吉

東京神田區駿河臺南甲賀町八番地
發行所　成美社